

もよもとがダンジョンにいるのは間違っているだろうか【DQ2×ダ
ンまち】

こうこうろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

破壊神シドーを倒し、平和を取り戻した後のもよもとの名前で有名なローレシアの王子「ロラン」が、ルビスの手によってダンまちの世界に飛ばされる。

迷宮都市オラリオの廃教会の中で出会ったのは、一人も眷属がないヘスティアという名の女神であつた。

※ドラゴンクエストモンスターズ+、ドラゴンクエスト2小説版の設定を使用しております。

今のままだと再びエタリかけてしまいそうなので、Twitterを始めてみました。更新止まつたらこっちで催促してやつて下さい
↓@koukourora

目
次

プロローグ	
第一話	1
第二話	8
第三話	16
第四話	26
第五話	36
第六話	43
第七話	52
第八話	63
第九話	72
第十話	83
第十一話	92
第十二話	100
	108

プロローグ

鬱蒼とした真夜中の森の中を当てもなく歩きながら、青を基調としたメット、ゴーグルそして服を着込んだ男——ローレシアの王子であつたロランは、過去に思いを馳せていた。

——ローレシアという国は、彼が生まれてからずつと平和な国だつた。しかし、その平和は邪悪な心を持つ一人の神官によつて破られてしまつた。

その名は、ハーゴン。

百数年前にはローレシアと同じ国であつたムーンブルク王国の城を滅ぼし、満身創痍の状態で城から脱出した一人の兵士がかの恐ろしき神官の所業を父であるローレシア王とロランに伝え、そのまま息を引き取つてしまつた。

彼は勇者ロトの末裔であつた。

王子として、勇者の末裔として幼いころから古流剣殺法の指南を受け、剣の師には、天性の才があるとまで言われていた。

彼は勇者としてローレシアを、サマルトリアを、ひいては人々を守るために、ちっぽけなどうのつるぎとかわのよろいを身に纏い、邪神官ハーゴンを打ち倒すために旅立つた。

……今思えば、既にその時点でローレシアの王子の運命が決められていたのかもしれない。

旅は、苦難の連続であつた。

強大なモンスター、罠の張り巡らされたダンジョン、ハーゴンの神殿に待ち構えていた殊更に強力な魔物たち——

——山のように大きな巨人、アトラス

——強力な呪文使い、バズズ

——強烈なこうげきに加え、稻妻の呪文をも操る、ベリアル

そして、邪神官ハーゴン。彼らを打倒せしめた時、平和が訪れるのだと思つていた。

ハーゴンが自身を生贊に捧げ、呼び出された破壊神シドーと相対す

るその時までは。

『神』との闘いはまさに死闘だつた。

お互いが死力を尽くし、どちらかが果てる時まで全力で剣を振るつた。

そして——勝利したのだ。

シドーに勝利することが出来たのはひとえに稻妻の剣の魔力を注ぎ込み、その輝きと真の力を取り戻したロトの剣と、心強い仲間たちの存在があつたからだろう。

呪文と卓越した剣技を両方とも使いこなしたサマルトリアの王子、サトリ。

強力な呪文、回復の魔法を使い、僕らの闘いを後ろから支えてくれたムーンブルクの王女、ルーナ……彼らは元気にやっているのだろうか？

ロランが出奔してしまつたローレシアの国についても、今ではもうどうなつているか彼には分からない。

跡継ぎであつたロランがロトの剣と愛用していた盾を持ち、着の身着のまま行方知れずになつてしまい、混乱が収まらず、最悪反乱がおきたかもしれない。

それでも……それを分かつていながらも、彼は耐えることが出来なかつた。

今まで自分の戦う理由であつた人々からの恐怖を抱いた視線には。畏怖の感情には……とても、耐えうるものではなかつた。

——『破壊神を破壊した男』。

この異名が、ローレシア国民のロランに対する畏怖の感情を全て表していると言つていい。

魔法という奇跡の力も使わず、その人の理を超えた『ちから』と超一流の剣技をもつて破壊神と渡り合つたその力が、武力が、暴力が自分たちに向けられたとしたら……。

この国民の感情は、かろうじて生き残つた一匹の魔物が流した小さな噂がこの迫害の原因なのだが——それを今となつてロランが知る術があるはずもない。

今、ロランは自分が人間なのか……それとも、勇者という名の化け物なのか、疑問に思つてしまつてゐる。

人々を守るためにつけた力が、恐れられることになるだなんて思つてもいなかつた。

サトリやルーナもこの感情を味わつてゐるのだとしたら……そんなことは考えたくもない。

今、ロランが彼らにできることといえばさやかな幸せを、人々に愛される人生を送つてることを祈ることだけだ。

今にもモンスターたちが現れそうな深い森の中で一人歩きの冒険をすることだつて、並の戦士なら自殺に等しい行為である。

しかし、ロランは並の戦士ではない。下手に低レベルな魔物の群れなどが現れたとしても、彼の力をただ拳で振るうだけで瞬殺できてしまう。

そんな彼の圧倒的力量差を理解してゐるのか、この森に入つてから一匹もモンスターを見ていない。

……いや、違う。

ここには微かに聖なる氣があることをロランは感じ取つていた。彼の記憶違いでなければ、これは、アレフガルドの大地を創造した聖霊ルビスの気配に似ている。

遙か昔の勇者が彼女を救つた際、聖なる守りを授け、以降僕らロトの一族を守り続けてくれた精霊。

この聖なる氣がモンスターを退けているのだろうか？

その気配が最も強く感じ取れる場所を、ロランは探していた。

彼女なら、以前自分を助けてくれたように今の自分にも救いを授けてくれる気がしていた。

当てもない逃避行、その先に見つけたものは一本の巨木であつた。首を限界まで上げても、その足元からでは天辺が見えないほどに巨大だ。

そして、その場所は最もルビスの魔力を感じる場所でもあつた。

「……今日は、この木の根元で寝ようかな」

誰に言う訳でもなく、一人呟いた。

魔王を倒すために長旅をしていたからか、一日歩き通しでも疲れることはない。

しかし、久々にあの旅のことを思い出したからだろうか、気疲れを感じていた。

木の根元に寝るためにちよどいい場所が無いかを探る。仮にも一国の王子なのに、野宿に慣れてしまっている。

そんな自分に思わず苦笑が漏れた。

……そんなことを考えていたら、根の間に程いい大きさの隙間を見つけた。

男一人が横になるには十分だろう。

特にやらなければならないこともない。元々目的など無い旅なのだ。

あの頃と違い、地図を確認する必要も、仲間と語らうこともない。すぐに横になり、眼を瞑る。

ただ、夜、寝る度に実感するこの孤独感だけは、いつになつても慣れることはないだろう……。

ローレシアの王子、ロランは、薄れゆく意識の中でルビスの声を聴いたような気がした。

「哀れる人の勇者よ。人に裏切られし悲しき勇者よ。せめて、この非力な私に出来ることは、私の加護も届かぬ遙か遠き安住の地へ、貴方を送り届けること……。」

ヘステイアは疲労しきった様子で、この『迷宮都市オラリオ』にある自身のホームである廃教会の隠し部屋への帰路についていた。

バイト先の魔石を使つた調理機器を壊してしまい、長い説教を食らい、時給を30ヴァリスに下げる旨を伝えられたばかりなのだ。

「だいたいヘファイストスもちょっと厳しすぎるよ……。いきなり追い出すとかさ……」

その声に女神としての霸氣はとても感じられない。

童顔ではあるが、一際可憐な顔も今ではその影もない。

無二の親友であつたはずなのに、怠惰な生活を送つていただけで追

い出すとは何事か！ と憤慨する。

自分のファミリアの眷属だつていまだに一人も見つかっていないのに……。

そのヘファイストスにバイト先と拠点を斡旋してもらつたというのに、なんと罰当たりな女神だろうか。

いつの間にか自分のホームの廃教会の入り口についていたらしい。その扉を開く——

——勇者が立ち直ることが出来なくなつた時、教会に戻されることは世界の理だ。

つまり、ローレシア『元』王子であるロランがこの廃教会に倒れていたのは必然であつたのかもしれない。

おお、ゆうしやよ にげだしてしまうとは なきけない！

これは、英雄に憧れた少年の物語。これは、その少年に恋した女神の物語。そして——神をも屠つた勇者の物語。

これは、少年『たち』が歩み、女神が記す【眷属たちの物語】——

「ちよつと！ 君、大丈夫かい!?」

青を基調とした青年に駆け寄り、その体を揺すぶる。

その献身的な姿は、大多数の自己中心的な神々とは違い、その優しさを垣間見せる。

「う、ううん……」

うめき声とともに起き上がる。

その背中には豪華な意匠が施された剣と、円形の盾が背負われている。その両方に女神であるヘステイアでさえ見たことの無い不思議な文字が刻まれている。これは神聖文字でも、共通語でもない。

「君は……誰だい？」

「僕？ 僕の名前はヘステイア、これでもファミリアの主神を務める女神なんだぜ！ ……まあ、眷属はまだいないんだけど……」

……ファミリア？ 眷属？ いや、そんなことより……女神？

まさか、例えればルビスのような神が、本当にこんなぼろぼろの場所にいるものだろうか？

しかし、彼女の持つ雰囲気が、どこかルビスと似通っていたのは感じ取れた。

感じ取つてしまつた。

「そ、そのファミリア、とか眷属つて……どういう意味なんですか？」

疑問に思つたロランが尋ねる。

彼の口調が、ただの少女ではなく女神であることを知つて自然と畏まる。

それを聞いたヘスティアは……まるで、世間知らずを見るような、怪訝な表情をしていた。

しかし、親切に、そして丁寧に詳しく教えてくれた。

要約してしまうと、ここは迷宮都市オラリオと呼ばれる、神々が降臨する以前から存続している広大な地下『ダンジョン』を保有する巨大都市であり、下界に降りたつた神々が恩恵ナルと引き換えに、ダンジョンの冒険、商業、製作、医療などの様々な目的を持つて人々を集め、組織するのがファミリア。

その集められた人々が眷属と呼ばれているそうだ。

「……なるほど、ヘスティアさんのファミリアにはその眷属になつている人がいない、ということですか」

「うつ。痛いところをズバズバ言うね……君。それより、君の名前は？」

「……僕の名前は、ロラン。あなたも、名前ぐらいは知つてゐるんでしょう？」

多大な覚悟を決めて、ロランは自棄になつたように、諦めたような表情で自分の名前を教える。

名前も聞いたことが無いような都市であつても、破壊神を滅ぼし、平和を取り戻した自分の名前くらいは伝わつてしまつてゐるだろう。……親切してくれた少女のような女神（？）から、あの恐怖を帶びた視線を浴びることを考えると……辛い。

しかし、この優しい少女に嘘をつくこともなんだか気が引けてしまつた。

「……？　ごめん、その……君のことは、知らないなあ」

首をかしげ、可愛らしい声で答える。

その言葉はロランにとつて、計り知れないほど衝撃的な言葉だった。

あまりのショックに頭を抱える。

その時、脳裏によぎつたのは、今まで夢の中の出来事だと思つていたルビスのあの一言であつた。

——私の加護も届かぬ遙か遠き安住の地へ、貴方を送り届けること……。

第一話

「ね、ねえ！君つてもしかして、他の町では高名な戦士なのかい？」
ショックに打ちひしがれたロランにヘスティアが期待を持つて問い合わせる。

腕に覚えのある剣士だから先の言葉がロランの口から出たと思っているようだ。

そんな剣士が自分のファミリアに入ってくれたなら！
一人も眷属がない女神がそんな希望を抱くのはある意味必然だろう。

(……でも、これは最後のチャンスなのかもしれない。)

もう一度、戦士として、いや、勇者の力を持つものが、普通の人間として生きることのできるチャンスだとロランは考えた。

ダンジョンを冒険する者——冒険者として生きる上で、ロランの異常ともいえる力量は、絶対に役に立つことは明白だろう。

そして……神々が下界に降りるような特殊な環境であれば、自分の力の印象も少しは薄まる……かもしれない。

もしかしたら、自分より遥かに強い冒険者がこの都市に存在する可能性だつて捨てきれないのだ！

最悪、他の冒険者たちに実力を隠してしまえばいい。簡単だ、人に見られぬよう気を払いながらモンスターに剣を振るえば済む話なのだ。

……ロランという『勇者』を知らない、この世界の中では。

そう考えると希望も湧いてくる。

元のように、自分を知っている世界のように英雄として、なんて大それたことは望まない。

人に恐怖される英雄なんて、もう真っ平御免だ。

——そして、ダンジョンに潜れば少なくとも、目の前で困っている可憐な女神様は助けることが出来る。
ロランは確かに裏切られた。

魔王からその身を挺して守つたはずの国民たちには。しかし、勇者

としての心までは、正義感までは捨てていない。

困っている人あればその手を差し出し、邪悪なるモンスターに虐げられている人あればその剣をもつて斬り伏せる。
要は、人一倍——優しいのだ。

人を慈しみ、その身をもつて人々を守ろうとする心。

それが、勇者として必要な唯一の資質と言つていい。

確かに、ロランは勇者ロトの子孫であつた、勇者の血統であつた。しかし、そんなことは瑣事でしかない。

ハーゴンに襲われたムーンブルクを救うこと、世界の人々を救わなければならぬと、ロランという男は心からそう思えたのだ。

「……はい。僕は、そうだな……古流剣術を修めた、国一番の剣士でした。」

嘘は言つてない。

全て本当のことと言うならば剣士、という単語の前に、破壊神と剣一振りで渡り合える、という但し書きは付くが。

「へえ！ それは凄いじゃないか！ ……それで、その……君は、冒険者になるためにオラリオに来たのかい？ あまり、ここのことについても詳しくないようだし……。」

……どうにも、彼女の歯切れが悪い。

もつとも、零細ファミリアに優秀な剣士を勧誘することに気が引けてしまうのは仕方の無いことだろう。

「その……あまり、盛況しているとは言えないんだけど、僕のファミリアなんてどうだい？ まあ、拠点はぼろぼろなんだけどね。一応、冒険者のための探索ファミリアにしようと思つてたし……まだ、一人も集まつていないんだけど。」

見る限りは貧乏で、切羽詰つているからなのかも知れないが、この廃教会に倒れていただけの素性も知れない男が言う事を信じて、面倒を見てくれるなんて、やっぱりヘスティアは心優しい人……神？、なのだろう。 この優しさに報いてあげたい。彼女を助けてあげたいと思うのは、勇者共通の矜持が理由なのだろうか？

いや、ロラン自身が彼女を助けてあげたいと思つてている。この力

を、誰かのために使えることが嬉しい、今の化け物じみた自分の力でも誰かを助けることができる、ということを実感できることが彼には嬉しく感じられた。

「もちろん、こちらからもお願ひします。ヘスティアさん、僕をあなたの眷属に加えてくれますか？」

ロトの血族に連なる勇者たちにはルビスの加護がかけられるという。

しかし、今ではそんなことは関係ない。彼が他の神からの恩恵を受けることには、障害は生じないだろう。

ロランの立つ場所は、大地の精霊の力も届くことはない、アレフガルドから世界の壁さえも超えた遙か遠き都市、オラリオなのだから……

「……そうだよね、君が国一番の剣士だというならもつと他にいいファミリアが……つて、いいの!?」

——ここに、勇者の葛藤を知らぬ喜色満面の女神が一人。

……ヘスティアに促されて、ベッドにうつ伏せになつて横になつているロランの、先ほどまでの決心が既に揺らいでいた。

彼はトレードマークの青い服を脱ぎ、上半身裸になつている。

ファミリアに入るに至り、ヘスティアから懇切丁寧な、様々な説明を受ける上で、どうしても聞き逃せない単語が耳に入ってきたからだ。

勇猛果敢にして、天下無双の勇者を震え上がらせる存在、それは『ステイタス』と呼ばれる、オラリオでは何ら変哲のない数字である。

これは、『神の恩恵』を細かくパラメータ化した数値の名称だ。

……『魔法』は関係ない。ロランには魔法が使えないのだから。神の恩恵を受けた者が発現させる固有の能力『スキル』……も、まあ、彼の推測でしかないが、問題はないだろう。

ロランには特殊な能力はなく、己の剣術しか戦闘には使つてこなかつたのだから。

『発展アビリティ』についても問題ない。

何かに特化した特性とでも言うべきそれは、Lv. 2以降、レベルアップ一回につき一つ発現する可能性があるらしい。

しかし、自分に発現するとしたら剣に関する物だけだろう。ダンジョンにおいて剣士は珍しくないと言っていたことから、他の冒険者に知られたとしても、別に異常なことなど何一つ無い。

問題は、『レベル』と『基本アビリティ』だ。

レベルとは冒険者のランクを表し、レベルアップのためには自分の限界を突破するような経験を必要とするそうだ。

大多数の冒険者はLv. 1であり、迷宮の存在しない都市外ではレベルアップ 자체が困難であるので、Lv. 3もあれば頭一つ以上飛びぬけた存在と認識されるようだ。

果たして自分、つまりロランはどうだろうか。

困難な旅を乗り越え、凶悪な魔物を何十、何百とその剣と仲間の力をもつて屠ってきた。

そして、遂には破壊神を破壊するに至ったのだ。自画自賛のようで氣恥ずかしいような気持ちを覚えるが、その経験がとても自分の壁を乗り越えるような経験で無かつたとは言えない。

次に、基本アビリティである。

『力』『耐久』『器用』『敏捷』『魔力』の五項目からなる基礎能力、これらも先のレベルと同様に、異常な値を示すかもしれない。

(……基本アビリティが他の冒険者と比べて高かつたのなら、ヘスティアさんは喜んでくれるのだろうか？ それとも、ローレシアの人たちみたいに……。)

自分自身の嫌な想像に思わず寒気が走る。

あの恐怖に満ちた数多の眼……あれを、ヘスティアから向けられた時、口ランは耐えられるのだろうか？

……それとも、耐えきれずに彼女の前からも逃げ出してしまうのだろうか？

(……まだ、基本アビリティの方はマシだ。)

例え、この目の前の少女には畏れられようとも、助けたいと思つた女神から逃げ出す、という最悪の方法ではあるが、あの『眼』から逃

れることはできる。

冒険者のステイタスは部外秘のものであるからだ。

しかし、レベルについては例外なのだ。これのみは、ダンジョンの運営を行っているギルドへの公開、申告が義務付けられてしまつている。

冒険者だけでなく、全てオラリオ都市民、ひいては他のファミリアを組織する神々にまで知られてしまう。

この事実が、ロランの眷属になるという決心を鈍らせる。しかし

…

「やつぱりちょっと不安なのかい？国一番の剣士って言つていたからね：思つていたより低いステイタスが出てきたらショックだよね……。でも、大丈夫！僕もしつかりサポートできることはしてあげるからさ！当分は二人三脚で頑張つていこうよ！」

この、いかにも「初めての眷属が出来て、嬉しいです!!」といった気持ちを、全身で表しているヘスティアの笑顔を見ると、そんなことは言えなくなってしまうロランであつた。

（……そうじゃないんです、ヘスティアさん。ステイタスなんて低ければ低いほどいいんです……。）

——ロランの、他の冒険者が聞いたら激怒しそうなほど贅沢な、声にはとても出せない望みが叶えられるのか、それが今分かるのだ……！

流石に初対面のロランに跨つたりはしない。

ベッドの横に立つヘスティアの指が、優しく背中に触れる、その時、彼の背中に神の使用する神聖言語がまるで刺青のように、微かに溢れる光と共に刻まれる。

これが、神の恩恵の授け方。刻まれたステイタスは、神々にしか理解できない。本来なら、これを共通語に書き直した紙にでも書いて渡すのだが……。

——ヘスティアの動きが完全に止まった。

へんじがない、まるでただのせきぞう（石像）のようだ。

その豊満な胸部、美しいといいうよりは愛らしい顔、そして女体の美

しさを損なわない、しかし、いやらしいという表現は適さない服装。ツインテールにまとめた、腰にまで届きそうな美髪——本当に像であつたなら、一千万ヴァリスを下回ることはないであろうが。數十秒経つた後も、互いに無言であった。

ロランは、その逞しく隆起した筋肉を備えた、まさに戦士といった肉体を上半身裸で晒したままで、なんだか恥ずかしく。

対するヘスティアの……その表情は驚愕を通り越して、今にも気を失つてしまいそうに茫然とした様子のまま、ステイタスが完全に刻まれた後も、二人の時は止まっていた。

——初めに動いたのは、ヘスティアだつた。ステータスを翻訳するために、なげなしのお金で用意していた羊皮紙とペンをベッドのそばに位置する机の上から手に取り、背中の数値を書き写していく。

見間違いが無いか、何度も何度も確認しながら。

無言で、その羊皮紙をロランに渡す。

その表情はロランには見ることができなかつた。

あの無言が、恐れによるものだつたら……どうするべきか分からない。しかし、まずは自身のステータスを確認しなければならない——

勇者としての自分を知らない、遠い世界に来たにも関わらず、共通語を読むことが出来た。

(もしかしたら、今まで話せたのも、文字を読むことが出来たのも、最後のルビスの加護によるものかもしれないな……。)

なんてあてもない想像を、心中で苦笑しながら自分の羊皮紙を確認する。

そこには、様々な数値が次のように、簡潔に書いてあつた。

ロラン Lv. 10

基礎

力・・・S 921

耐久・・・S 908

器用・・・B 729

敏捷・・・A 816

魔力 · · · I

0

癸酉

【劍士】 【怪力】 【共闘】 【耐異常】

《魔法》

・人に仇なす邪悪の前に、彼が膝を屈することは無い。

……まず、目についたのは900を超えている数字だ。

発展アビリティの剣士は、まあ分かる。

幼いころから剣を握っていた身であるので当然だ。

共闘は、中間ノ共ノ旅をすみぬゝ身に着、だらのダリノ考えつてゐる。

而異常があるのは恐ろしい毒や
死の呻文を受けて終らざることか
らだろう。

うことだろうか。

ベッドに座り直し、まじまじと羊皮紙を眺めた後、その紙の奥で拳を握りしめ、額を伏せて震えるヘスティアさんに氣付く。

何を感じているのか、どんな表情をしているのかも分からな

〔.....〕

す？

「……凄すぎるよつ！ 口ラン君！ 君は間違いなく国一番、いやつ！ オラリオ一番の剣士だよつ！ 僕も鼻高々だよつ！ 間違いなくロキ・ファミリアとか、フレイヤ・ファミリアにだつて君より強い冒険者ははないだろうさつ！」

彼女に両手を掴まれ、捲し立てられる。

その顔は喜び半分、ステイタスを見た時の驚き半分といった表情だ。少なくとも、その顔の中にちつとも恐怖の色なんて見られない。

——それが、嬉しかった。

心の中で、一番に恐れていたこと、それは、この世界の全てから拒絶されること。

(……きっと、大丈夫だ。)

心優しき女神と、これから現れてくれるだろう同じ眷属たちとな
ら。

どんなことだつて乗り越えられる仲間（パーティ）になれるはず
だから……

第二話

——今日はもう遅いから、明日、ダンジョンまで案内してあげるよつ！

そう元気よく提案してくれた女神さまも、今では見る影もない。ベッドに入つてすぐに、微かな寝息を立ててぐつすりと眠つてしまつて いる。

「……よつほど疲れていたんだろうなあ」

床に座り込みながら、ヘスティアさんを起こさないよう、小さな声で呟く。

仮にも女神であるのに、こんな夜分遅くに帰つてくるだなんて、苦労しているのだろう。

僕にもベッドで寝るよう勧めてくれたが……女神だから本当の年齢は分からないとしても、見た目は幼い少女と一緒に寝るのは、危険だ。

倫理的に、そしてロランの社会的に。

それより、ついさつき大樹の根元で寝たばかりだと感じるのに、ロランにも眠気が襲い始めているのは、どういうことなのだろうか？

……思えば、今日は色々なことが起き過ぎた。

考えなければならないことが多すぎて、頭を使い過ぎたのかもしない。

元々、自分は考えるよりも先に手が先に出るような性格なのだ。

……サトリには散々それをからかわれたけど、彼にとつて、今はそれがも懐かしい。

この世界で生きる覚悟は既に出来ている。

それでも、あの二人には会つておきたかった。

ローレシアを出奔した身ではとても叶わないであろう願いだけど。

ロランには、とても昔に感じる過去のことについて考えながら、眼を閉じる。

床があつて、屋根があるだけ野宿よりは大分マシだ。

それに、今日はあの孤独感が無い。

誰かの存在を近くに感じながら寝ることなんて、ここ最近は無かつた。ベッドなど無くとも、彼にはそれで十分だつた……。

明日、ロランはダンジョンに潜る。

どんな危険があるか分からないが、体力はいくらあつても多すぎる、ということはないだろう。

早く寝て、彼は英気を養わないといけない。例え、どんなモンスターが現れようとも、今は床に静かに横たわっている『ロトの剣』と、『ちからたて』が助けとなってくれるだろう。

——廃教会の静かな夜が去つていく。

「さあ、今日はいよいよダンジョンに行つてもらうよ！ その前に、ギルドで冒険者登録もしなきやいけないけどね！ ……もしかして、緊張で眠れなかつた？」

「いえ、大丈夫です。ところで、ヘスティアさんも着いてくれるんですか？ 道を教えてくれれば、自分一人でも……」

「大丈夫だよ。今日は、バイトも休みだからね！ まあ、行けるのはギルドまでだけだ」

ギルド——オラリオの都市運営、冒険者及び迷宮の管理を担うその組織は、冒険者たちに手厚いサポートを行つてくれるが、あくまで迷宮が生み出す富を管理するための組織であり、トラブルには、よほどのことがない限り介入しない……らしい。

「さあ、出かけよう！」

ヘスティアが廃教会の扉を開く。

扉の隙間から朝日が差し込む。その中に広がつていたのは、まさに異世界であった。

まず彼の目に入つたのは、ダンジョンへ向かう冒険者たちだ。

……建物ではなく、武器を身に着けた者たちを先に注視してしまうのは、ロランも一介の剣士であるからだろうか。

……確かに、中々良い装備を身に着けた人が多い。

前の世界で、ロランが訪れた村の自警団の人々のものと比べれば遥かに上だ。

冒険者の命を直接守ってくれるのが装備の存在である。

良い装備を身に着けている、ということはそれだけ迷宮の危険も多いことを表している。

彼の気が一段と引き締まる。

町並みにも前の世界と比べて違いが多い。そもそも都市の広さが段違のだ。

目の前には長く、広い一本道が通つており、建物の軒数など想像もできないほど。

……このような道が何本もあるのだとしたら、建物の数はとても数え切れないだろう。

壁材もより堅牢なものに見えるし、道具屋や武器屋の数がローレシアと比べて段違いのようだ。

視界に入るだけでも二、三軒ある。

前の世界では、一つの都市にそれぞれ一軒ずつあれば良い方であつたのに。

そして、一際目を引くのが異様に高い一本の塔だ。

あれが、バベルと呼ばれる施設なのだろう。

これほどまでに目立つなら、迷うことなど無さそうだ。

バベル……ロランはヘスティアから聞いたことしか知らないが、それは天にまで届きそうな白亜の摩天楼。

この建造物があるからこそ、ダンジョンで生まれたモンスターが都市に溢れることが無く、市民の安全を守つている……らしい。

そこには様々な施設が用意されており、ダンジョンに潜る冒険者たちが不自由する事は少ないそうだ。

ロランは疑問に思う。

どのようにすれば、ここまで巨大な建造物を建てることが出来るのだろうか、と。

その身長差から、歩幅の違いが大きく表れてしまうが、ロランがヘステイアに歩調を合わせる。

二人はギルドに向かつて歩みを進める……ロランにとつては、少しゆっくりと。

「……あれが、ダンジョンの入り口なんですね」

「そうとも！ ……君ほどの戦士なら、ソロでも地下の深い階層まで軽く到達できるだろうけど、危険は冒しちゃだめだよ。冒険者は冒険しちゃいけないってことは、よく言われているんだから」「大丈夫ですよ。今回は大事を取つて……日が沈む頃には帰つてきます」

どんな危険が潜むか分からぬのだ、今回は、稼ぐお金は少額でも構わないから先に進むのは控えるべきだろう。

「まあ、新人にはダンジョンについての講習をしてくれるはずだから……君ほど力量があると、どうなるか分からぬけど」

そうこうしている内に、北西のメインストリートに面するギルドの入り口にまで辿り着く。

白い柱で構築された姿形はまるで神殿のようであった。ここで、口ランはオラリオの住民として認可されるために、そしてダンジョンに入るための冒険者登録をしなければならない。

「さあ、口ラン君！ 君はダンジョンの探検を、僕は二人目の眷属になつてくれる人探し！ お互に頑張ろうね！」

「ええ、期待してますよ。新しい仲間が来てくれたら、僕も嬉しいですから」

「うつ……。また僕にプレッシャーをかけるようなことを……」

二人は別れ、お互いの目的に向かつて歩き出す。

口ランはダンジョンへと向かうための準備として、ギルドの入り口をくぐり抜け、ヘスティアはメインストリートへとその豊満な胸を揺らしながら走り出す。

オラリオに、騒がしい朝が訪れる――

――勇者に困難は付き物である。

モンスターが跋扈する道中然り、その莫大な魔力を思うままに使ひ、人を苦しめる魔王然り……。

しかし、今の勇者を苦しめるのは、ただ一人の受付嬢であつた。

その名をエイナ・チュールという、ブラウンの髪をセミロングに切

り揃えた、眼鏡の似合うハーフエルフである。

「ですから、あなたのここに書いてあるレベルが10、というのはどういう事かと聞いているんです」

「あの、僕もヘスティアさんに教えられただけで……自分で背中を見たわけではないですし……」

そう、ダンジョンの目と鼻の先にまで届いた今となつて、彼のその異常な力が障害となつたのである。最も、彼女の疑いは当然のことでもあるのだが。

そもそも、ダンジョンの無いオラリオ以外の土地でレベルアップすることは稀である。

そのオラリオの冒険者でさえ、L V・1の冒険者が大多数であるというのに、初めてダンジョンに潜るために登録しに来た男が、レベルを記入する欄に迷いなく『10』と記入した時は、眩暈に襲われた。たまにいるのだ、自身の力量を偽る愚か者が。そんな愚か者ほど、迷宮の中で競うように早く死んでいく。

「いいですか？ 現在ギルドに登録されている冒険者の中で、レベルが最も高い冒険者はフレイヤ・ファミリアに所属するオッタルという、L V・7の冒険者です。……もう一度だけ、聞いてあげます。あなたはその人よりも強い、ということですね？」

「え？ ……いや、まあ、そういうことになるのかな？ ……アハハ

……」

ロランは、冷や汗が止まらない状態であつた。

通常、周囲の冒険者や職員が考えるような、嘘をついたことに対する焦りではない。

最高レベルの冒険者でさえL V・7である、という点についてのみ焦りを感じていた。

つまり、彼はレベルだけで言えばオラリオでも最高位に位置する、ということになる。

もちろんレベル差だけが強さの指標になるとは彼は微塵も思つてなどいないが。

……ヘスティアが僕をオラリオ一番の剣士だ、と褒め称えたとき、

流石にちよつとは誇張も入っているのだろうとロランは考えていた。だが、それは虚偽混ざらぬ賞賛だつたのだ。

過去の自分の甘い考えが、今の自分に向かつて牙を剥いてくる。それはもう、特大の牙が。

人は、それを『自業自得』というのだ。

「はあ……。申し訳ありませんが特例として、背中のステイタスを私と、ギルドを運営する神、ウラノス様に拝見していただきます。心配はいりません。『君臨すれども統治せず』を貫き通してきた御方です。下手に面白がつてレベル以外のステイタスを公表するようなことはなさらないでしよう」

「そ、そんな事までしなきやいけないんですか!? ……いや、まあ、仕方ないのかなあ……?」

思わずエイナの口からため息が漏れる。

『死』という形ですぐに分かる嘘だということになるのに、ここまで貫き通す愚か者に対して、呆れを通り越して心配してあげた自分が馬鹿らしくなる。

すぐに後悔することになるだろうから、忠告したというのに……。エイナのこの勘違いは致し方ないことだ。

目の前にいる男が、『破壊神を破壊した男』などとは、例え神であつても思い付くことすらないだろうから。

この後すぐには、エイナは後悔することになるだろう。オラリオ最強の剣士といえる実力を持つているくせに、妙なところで無知な新人冒険者の担当になってしまったせいで。

ステイタスを他の冒険者に見せないために、ロランとエイナの二人は個室へと移る。

その背中には、彼女が想像していた、一介の新人冒険者らしい平凡なステイタスではない。

人間の身でありながら、神の領域に一步踏み入れた剣士のステイタスが、正真正銘の神の恩恵として刻まれているのだ——

北のメインストリートを歩くヘステイアは、彼女の眷属であるロラ

ンについて思いを馳せていた。

確かに、初めは彼がの実力が高いことが純粹に嬉しく思えた。しかし、冷静になつた今、考えてみれば……

「ダンジョンも無いような所で、L.V. 10になるような経験をしたつてことになるからねえ……」

要は、ダンジョンを潜り抜けるよりも遙かに困難な偉業をあの若さで成し遂げたことになる。

それは並大抵のことではない。

ダンジョンで発見されている中で、最強のモンスターを倒したところでなれるかどうか分からぬようなレベル。

彼は、既にそんな敵を打倒していることになる。

気にならない訳がない。

彼の過去は、自分の眷属として、ファミリア家族として、いつかは聞かなければならぬことなのだろう。

しかし、その気持ちを妨げるのは——彼の『目』だ。

彼は、優しい人柄だとは思う。

ヘスティアは女神だ。

人と話せばその人となりは簡単に分かつてしまう。

ロランは、彼女が今まで会つた人の中でも一、二を争うほどには人が良いのは間違いない。

少し会話を交わしただけの仲なのに、貧乏で、ヘツポコで、零細なヘスティア・ファミリアに入つてくれたことからもその心が分かる。そんな心優しい子の瞳から——時折、光が消えるのだ。

あの憂いを帯びた眼を、ロランのような子が持つているということ。

それは、決して後ろ暗いような経験からではないだろう。

理由は分からぬが、とても深い傷を心に負つているのだと、ヘスティアには理解できてしまった。

深い深い彼の傷を、自分がすぐに癒せるとは思わない。時を待つべきなのだ。

(――ロラン君が、自分から話してくれる、その時まで。)

その時、ヘスティアの眼に一人の少年が映る。

特徴的な白髪と赤目を持つ彼は、メインストリートから一本外れた街路の脇から出てきたらしい。

そこは、彼女が永遠の宿敵と認識するロキが主神の、数多く存在する探索系の中でもトップクラスの『ロキ・ファミリア』の拠点がある場所だ。

彼は目に見えて落ち込んでいる様子だつた。

(――大方、あの意地悪なロキに断られてしまつたんだろう。も、もし
かしたら、彼が二人目の眷属になつてくれるかも!)

そんな期待を抱きながら、彼を尾行する――

これが運命の出逢いだとということを、女神はまだ知らない。
ルビスの起こした奇跡が、一人目の眷属を変えようとも――この運
命は、変わらないのだ。

ロランは、ダンジョンに入るまでに妙に手間がかかつた。

本来なら、自分の主神以外にはわざわざ見せなくとも良い、ステイタスが書かれた背中をエイナとその主神、ウラノスに見せる羽目になつてしまつたからだ。

ギルドの地下で祈祷を捧げていたウラノスに、ロランの背中を見てレベルに誤りが無いことを確認していたはずのエイナが

「念のため！ 念のための確認ですから！」

と、あまりにも強く推すので、ロランは渋々その背中を見せたのである。

ウラヌスさんにも彼のステイタスに虚偽の証が無いことを証明してもらつてから、ようやく解放された彼は遂にダンジョンに潜ることが出来たのである。

……ロランのステイタスを見たとき、エイナさんは目の前に映る光景を信じられないような表情であつた。
ウラノスも非常に驚いていたようだけど、すぐに祈祷の体勢に戻つてしまつた。

そんな嫌な記憶をダンジョンの地下一階……オラリオでは、一階層

と呼ばれる場所で思い出す。

「……できれば、大した騒ぎにならないといいんだけど」

……薄青色の壁に囲まれたロランの願いが叶う事はないだろう。

そんな悩み多き彼の前に、突如モンスターが現れる！

ゴブリンがあらわれた！

コボルトAがあらわれた！

コボルトBがあらわれた！

モンスターが現れた瞬間、一瞬の戸惑いもなく、ロランはその拳を握りしめ、最も近くにいたゴブリンに振るう。

その手に、『ロトの剣』は握られていない。

一連の動作に、一切の容赦は無かつた。

何の変哲もない『せいけんづき』の動作、違うのはただ二つ、そのスピードと威力だけ。

ゴブリンは、幸運だつた。

痛みも感じる時間も無く、ただその身を黒い砂のような物質と、魔石へと身を変えることで消滅する事が出来たのだから。

並外れた『力』によつて放たれた拳……ではなく、実際にはその拳によつて発生した圧力、つまり拳圧のみでもつて絶命させられた。もつとも、『ロトの剣』を素振りした時の風圧で石柱をも粉々に砕くことのできる男だ、石よりも遙かに柔らかいダンジョン最弱のモンスターであれば、この程度の業は容易いといえる。

人類の敵として、人に襲い掛かる本能を最優先とするはずの残されたモンスターたちがたじろぐ。

もしかすると、ダンジョンの壁から生まれる怪物たちの中で初めて、感情を得るという進化をしたのかもしれない。

——『恐怖』という名の感情を——

彼らに、ロランの右足が弧を描いて迫る。『まわしげり』と呼ばれるその攻撃。

犬頭のモンスターたちは、その技を避ける術など持つていなかつた。

「……まあ、こんなものかな」

咳きながら、自前のリュックに小さな魔石を回収する。

モンスターの生命力の核であるそれは、様々な道具に用いられている。

これをギルドで換金することで、冒険者は飯の種を得ることが出来ているのだ。

……剣士であるロランが、何故、徒手で戦えるのか疑問に思つた方もいるだろう。

もちろん、剣を使つたほうが戦いやすいのも事実ではあるが。

彼が格闘戦にも秀でている理由は、偏に習得した古流剣殺法の流儀にある。

……ヘスティアに伝える際は、古流剣術だと誤魔化したが。

この流派は特に実践を重視し、試合の際には剣を落とされた程度であれば、そのまま続行するというルールが存在する。

故に、未熟であつた頃のロランは師匠や兄弟子に武器を叩き落とされ、徒手での格闘を強いられることが多かつた。

もつとも、ロランは幼い頃からある程度には徒手格闘もそこそこの腕前ではあつたが。

さらに武術では、派手な技が注目されがちだが、体裁き、足運びなども、戦闘においては重要な要素である。

一つの流派を完全に修め、極めたロランほどの戦士であれば、それらを生かし、格闘術においても並の武闘家よりも優れた技量を発揮する事さえ可能となるのだ。

魔王を倒す旅の途中の戦闘において、剣を弾き落とされることもあつた。

その時、この技術は役に立つものである。

——この程度では、剣・盾共に装備する必要はない。

ロランの「こんなもの」という発言には、暗にそういう意味があるのだろう。彼の主神が言つた通りに、ロランが探索するうえで、上層と呼ばれる地点で苦戦することはないだろう。

第三話

——勇者初めてのダンジョン探索、特にハプニングも起こらず、九階層に至るまで特筆すべき出来事は起こらなかつた。

一階層のモンスターは足止めにもならず、一瞬でその儂い生命が散つていつた。

勇者を苦しませた存在は唯一、横幅が限りなく広い大通路のみである。

(誰が、どうやれば地下の空間にここまで広い通路を作れるんだ……?)

要は、ただ答えのない問題に頭を悩ませただけなのだが。
二階層から四階層に至つても問題は起きない。

ロランはその名を知らないが、『ダンジョン・リザード』と呼ばれるヤモリのモンスターもロランの前にその身を現した。

……しかし、一階層のモンスターよりも僅かに大きい魔石を残して、黒い砂となり消滅する以外の出来事は起きる事はない。

五階層に至つて、壁面が薄緑色に変わりダンジョン自体の構造も以前の階層よりも複雑に変わる。

だが、そこは数多のフィールドを突破してきた勇者の面目躍如といつたところか。

特に迷うことなくその歩を進める。

——最善の道を突き進み、モンスターを毛ほどの障害にも感じさせず、ダンジョンを蹂躪するその姿。

もしも、迷宮が明確な意思を持つていたとしたら、まさに悪夢のような存在。

いや、夢であつたならどんなに良かつたことだろう。

単眼を持つ力エルのモンスター、自慢の舌による攻撃は、伸ばされたそれを逆に掴まれる。

怪物として生まれ落ちた生涯の中で体感したことがないほどの力によつて引き寄せられ、彼の拳の前に黒き砂に還元させられる。

自身の特徴を利用され、その身を滅ぼすという皮肉な運命を辿るこ

とになった。

異様に長い腕の先に、ナイフのような三本指を持つ人型のモンスター。そのリーチの差を生かす時は来ない。

純粹な戦闘力では六階層の中では随一だが、それより遥か上の戦闘力を持つ男の足元にも届くはずもない。

いとも容易く懷に潜り込まれ、『せいけんづき』を叩き込まれる。

『フロッグ・シユーター』『ウォーシャドウ』、両名とも全く相手にならない。

しかし、上層には新米殺しの名を持つあのモンスターがいる。

——そのモンスターの名を、キラーアントという。

鎧のように硬い外皮、その顎は新米冒険者の貧弱な防具ごと噛み千切る。

ピンチに陥るとフェロモンを発し仲間を呼ぶという厄介なおまけつきだ。

キラーアントの群れが、悪夢——ロランと遭遇する。

その数、およそ十数匹。

新人冒険者にとつては災害と言つていい程の最悪の事態。

ダンジョンに意識が宿っているのなら、恐らく快哉を叫んでいたことだろう。

新米殺しのモンスターであれば、あの数が襲い掛かれば——

ひと時の、風前の灯のような希望はキラーアントの外殻と共に容易く打ち碎かれる。

群れの中でも前方に位置していたキラーアント四体が同時に、まるで爆発が起きたかのような音・衝撃と共に、肉片と殻を無残に撒き散らす。

同時に炸裂したと錯覚するほどの速さによつて放たれた四発の拳、それは他の時代、場所において『ばくれつけん』と呼ばれる技に酷似していた。

残党を『まわしげり』によつて撃破する。

フェロモンを発する時間すら与えない瞬殺。

彼の前にモンスターはなく、彼が通つた道に残るは無数の紫紺色を

した魔石、ドロップアイテムのみ。

……そんな彼に、僅か十階層にして異常を感じさせた。

これは、迷宮の大健闘だつたといえるだろう——

(やつた！ やつた！ やつたんだ！ 僕は！ 二人目の眷属を作ることが出来たんだ!!)

日がもうそろそろ真上に来ようかという時、中央広場にて深く頑垂れていた彼——ベル・クラネルという赤目白髪の少年に声をかけてみたところ、何でもどのファミリアにも入らせて貰えず、途方に暮れていたのだという。

……彼には悪いが、チャンスだと思った。

迷宮で頑張ってくれているロランに報いるためにも、どうしても彼の仲間を見つけてあげたかった。

ダンジョンを探索するために必要な基礎知識を一通り伝え、彼の背中にヘスティアの血を媒介として『神の恩恵(ファルナ)』を刻んだばかり。

流石に一人目の家族と違つて、LV. 1の平凡なステータスではあつたが、そんなことは関係ない。

昨日と今日で合わせて二人も家族が出来たのだ。

今までの閑古鳥が鳴いていたファミリアとは大いに違いがある。しかし、たつた一つだけど、とても大きな問題がある。

その問題とは、ベル君の冒険者になつた目的だ。

彼は、祖父に聞かされた英雄譚に憧れて迷宮都市オラリオを訪れたのだという。

——彼は、英雄になりたいと思つてオラリオに来たそうだ。

農作業ぐらいしかしたことが無いと言つていたのに、ちよつと……いや、かなり大それた望みのように感じるけど、家族の目標なのだ。ヘスティアは、全力で応援してあげようと思える。

そこで問題となるのが——ロランの存在だ。

彼は、元いた場所で……多分だけど、英雄と呼ばれるに相応しい偉業を成し遂げているはず。

そんな人が、心の傷を負つてオラリオにいるということ。

それは——まだ分からぬけど、何か想像を絶するような出来事あつたのだろう。

(ベル君の目的が、彼の心の傷に触ることがないといいんだけれど……。)

いや、たとえそんなことが起きたとしても、僕らはもう家族なのだ。身内の傷を癒すことが出来ないなんて、そんなのは家族——ファミリアとは言えない。

セントラル・パークから廃教会に戻つてベルのステイタスを確認し、登録のためにギルドへ向かう途中でもそんなことを考えてしまう。

心配ではあるが、気を取り直して、入り口の前でベルと向かい合う。今日はもうメンバー探しもおしまいにして、今度は一緒に扉をくぐるつもりだ。

「さ、さあ！　ここが冒険者のためのギルドだよっ！」

「す、すごい建物ですね……。神様、ここで僕は何をすればいいんですか？」

「まずは、ギルドへの登録だね。心配することはないよ！　そう難しいことはないからね。その後、ベル君にはダンジョンについての講習があると思うから、ちゃんと勉強するんだよ？」

「僕、頑張ります！　……そういえば、ロランさんは今もダンジョンに潜っているんですね？」

「そうだよ……勉強会が終わつたら、二人で彼を迎えて行こうじゃないか！」

ベルがヘスティアから聞いた、ロランという人物像は概ね以下のとおりである。

昨日眷属になつたばかりの、青を基調とした装備を着た男の剣士。とても心優しく、オラリオで一番と言つていゝ程腕も立つ——もし、他の人が同じ事を聞いたとしても、少なくともオラリオ一番、という部分は信じないだろう。

しかし、この少年はヘスティアの言うことを一から十まで信じる、

純粹な人柄だつた。

純粹な人柄であつたからこそ、この後にヘスティア・ファミリアの名をオラリオ中に知らしめる珍事を引き起こすことになるのだ——

エイナ・チユールは安堵していた。

少し遅い時間に冒險者登録に来た赤目の少年——ベル・クラネルが、あのロランという規格外な剣士と同じファミリア、ヘスティア・ファミリアの名を記入した時は心臓が止まるかと思つた。

あの今朝の失態——ただの登録に、ウラノス様の元へ確認に行くという愚行を思い出してしまった。

驚愕の事態とはいえ、ダンジョンを鎮静化するために祈祷を行つている主神の邪魔をするべきではなかつた。

彼のレベル記入欄を祈るような気持ちで見たとき、『1』という数字が燐然と光を放つていていたように感じたのは、受付になつてから初めてのことである。

彼の隣に微笑みながら佇んでいる、ツインテールの少女が恐らくヘステイアという女神なのだろう。

今までそのファミリアの名を聞かなかつたことから、最近オラリオに降り立つた神様、のはずなのだが——

一人目の眷属がL·V·10、というのはどのようないちごの奇跡を使つたのだろうか……。

こんなこと、とても他人に……暇を持て余した神々にも漏らせるような話ではない。

明日の朝、ロランのレベルが発表されるまでは黙つていようと強く心に誓う。

ベル、という少年は彼とは正反対だ。

強さも駆け出し冒險者としては並で、どこか頼りなく感じる。

ここで彼女の世話を焼きな性格を發揮される。

ダンジョンの基礎について、今教え込んであげよう。

……仕事もひと段落したところだ、生き残るために知識なんてものは、幾らあつても足りないものだろう。

エイナにとつては簡易的な説明……しかし、あまり勉学に励んでこなかつた少年にとつては多大な労苦を伴うものであつたらしい。

ベルは疲労の色を顔に張り付かせながらギルド本部から出てくる。その脇にはヘスティアもいる……彼女は、そこまで疲れてはいないうだ。これも神の成せる業といったところか……？

もう、オラリオの太陽も落ちかける頃である。

ギルドの白い建物も夕日に照らされている。

「……そりゃあ、ロランさんもそろそろダンジョンから帰つてくる時間じゃないですか？ 確か、夕暮れにはダンジョンから帰つて来るつて言つていたんですね？」

「おお、そりゃあそりゃあ！ さつそく迎えに行つてあげよう！ ロラン君がたんまり戦利品を持つて帰つてきてくれるだろうから、二人の歓迎パーティをしようじゃないか！」

バベルに向かう二つの足取りは軽い。

ベルは強い剣士に会えるという、いかにも英雄に憧れる少年らしい期待から。

ヘスティアは、一人目の眷属がダンジョンから持ち帰るものが、今のは貧乏を吹き飛ばしてくれるだろうという期待と、眷属たちが初対面するという大イベントが……ちょっとびり不安も残るが……待つているから。

——銳利な角を持つた兎が、ロランに向かつて突進する！

それはまさに決死の特攻……言い換えてしまえば、無謀な突撃。その武器がロランに届くことはない。

いとも簡単にその角を掴まれ、壁に叩きつけられる。

衝撃によつて生まれた風圧が、黒い粉塵を撒き散らす……この作業も慣れたものだ。

もう何匹このようにして葬つたか分からぬ。

魔石を入れるリュックも、もうこれ以上は入らないように見える。明らかに容量の限界オーバーだ。

パンパンに張るまで詰め込んだ魔石とドロップアイテムは、どれ程

の金額になるのだろうか？

……それよりもおかしいのは叩きつけた壁に残る大きな亀裂である。

岩石ほどの硬さはあるはずのダンジョンの壁が、いくら怪物とはいえただの兎を叩きつけられただけで、まるで隕石でも衝突したかのように陥没などするものだろうか……？

ここでも己の臂力を存分に発揮して、ロランはぼやく。

「……次で、十階層か」

ここを降りて、様子を見たら帰るか……。

ロランはそんな判断を下しながら十階層に降り立つ。

しかし、帰ることが出来るのはもう少し後になってしまいそうだ。

一つの異常への気付き——モンスターが全くいないのだ、一匹も姿を捉えることが出来ない。

一階層から九階層まで、ロランには不自然といえる数のモンスターと戦ってきた。

ハッキリとした理由は分からないが……考えられる理由としては、ルビスから与えられた加護の残滓からダンジョンが神の気配を感じ取ったのか。

しかし、はつきりとした理由は定かではない。

八階層あたりから地面が草原に、そして天井が10M近くまで高くなつた。

木色の壁面に苔がまとわりつき、太陽の光と彷彿させるようであつた燐光が、霧によつて遮られている。

しかし、ロランの感じる違和感は今までに無かつた霧などではな
い。

ロランは、探索の続行を決意する。

この異変の原因を探つておかなければ、後々面倒な事になるという予感がした。

草を踏みつけながら、霧を物ともせずに進む。

その姿は既に臨戦態勢に入つてゐる。

霧に紛れて奇襲を仕掛けてくるモンスターがいる可能性は捨て切

れないからだ。

……敵襲を警戒をしていたロランの鼻に、嗅ぎ慣れた匂いを感じ取る。鎧に良く似たこの匂い……これは、人の血の匂いだ！ 素早く首を振り、周囲を見渡す。

そして……見つけた。

霧の向こうにうつすらと見える緑色の肌を持つ巨人……この姿に、ロランには見覚えがあつた。

(間違いない、あの匂いは……いつが原因だ。)

瞬間、ロランは駆け出した。

近寄るにつれ、奴の姿が明瞭になつていく。

ダンジョンの天井に届こうかという巨体、ぎよろりと動く巨大な一つ目、まともに食らつたら一溜まりもないであろう棍棒。

その巨人を、アレフガルドでは『ギガンテス』と呼んでいた。

ギガンテスは既に棍棒を振り上げている。

その目標は……足元で倒れている人影。

その身は、血に塗れていた。真っ赤な液体、それは恐らくその人の中を流れていたのであろう。

ロランが止めを刺そうとする巨人の姿を確認した時、彼の左腕に盾を、右腕には剣を『そ ubiqui』する。

この行為は、彼が全力を出す合図に近いもの。

彼の本分といえる剣士として闘うということ。

その時、無情にも……ギガンテスの右腕が、振り下ろされた——その棍棒を、盾のみで受け止めた剣士がいた。

無論、その男とはロランのことである。

僅かな隙に、彼は足元で倒れている冒険者を確認する。

鎧を着込んだその男……微かだが、息はしているようだ。

彼の装備である、『ちからたて』。

中央に魔力の籠められた宝玉をあしらい、この世界には馴染みのない紋様が彫られているそれは、ギガンテスの棍棒による一撃を受けても、僅かな変形すら見られない堅固さを備えている。

——迅速に倒さなければならない。この人の命を救うために

もつ！

彼の右手に握られる剣——口トの剣、これは口トの血脉に連なるものが人々を守る時に用いられてきた、絶大なる力を持つ武器だ。あらゆる魔を切り裂くという大業物。神、そして冒険者に殺意を抱くダンジョンの邪悪なるモンスターに効かぬはずも無し。

「……一撃で、終わらせてやる」

体に染みついた動きが、破壊神に助力する者たちとの闘いで研鑽された動きが勇者全力の一撃を作り出す！

——古流剣殺法『昇(のぼり)一文字』

古流剣殺法における奥義の一つ、剣による斬り上げの一撃。しかし、ただの一撃にあらず。

その斬撃はギガンテスを通り抜け、轟音と共に天井に深く、大きな傷跡を残す。

そのまま龍の王がその強靭なる爪をもつて傷を付けたかのようだ。口トの剣が持つ攻撃力と剣士としての技量、人外の域に達した怪力の集大成といえる一閃。

それはまさに一刀両断、ギガンテスはその胸に埋め込まれた魔石ごと切り裂かれる。

——かいしんの いちげき！ ギガンテス は たおれた！

その巨体を維持することが出来ず、一瞬にして消滅する。

残されたのは真っ二つに切断された魔石と、ロランと倒れた冒険者に降り注いだギガンテスの返り血のみ。

その魔石は、ギガンテスの力の源に相応しい大きさだといえる。少なくともロランはここまで大きい紫紺色の結晶を見たことが無かつた。

……これでは、リュックに収まりきらないだろう。

そんなことより、気にしなければならないのは冒険者の容体だ……。

魔石の回収方法は置いといて、男に『ちからたて』に秘められた魔法を使用する。

アイテムとして使用するだけで、『ベホイミ』の効果が得られる。

(この効果には、僕も助けられたものだなあ……。)

奇妙な感慨を抱きながら、ロランは男の容体を手早く確かめる。

——男の意識はまだ戻らないが、傷は塞がつたようだ。

しかし、例え死ぬことは無くとも、早く安全なところで休ませるべきだろう。

そう考えたロランは、顔に付いた返り血を拭うことも程ほどに、冒険者を背負う。

……鎧を着た、大の大人の冒険者をまるで重さを感じさせず軽々と背負う膂力、並の人間のものではない。

両断された魔石を小脇に抱え、駆け足で出口に向かう。

モンスターから見れば、格好の獲物のように見えることだろう。

両手がふさがつたこの状況、敵に襲われでもしたら……まあ、対処できない、ということは無いだろうが、行きよりは危険な道になることは間違いない。

それに、背負っている人も心配だ。

早く帰るに越したことは無いだろう。

その足取りは軽かつた。

……アイテムの詰まつたリュック、冒険者、巨大な魔石を抱えてい るにも関わらず、である。

第四話

「……ロランさん、出てきませんね。神様……どうします？」

「うーん、よっぽど深くまで潜ったのかなあ。もうちよつとだけ待つて、来なかつたらホームに帰ろうか。お夕飯の準備もしなきやならないからね」

ヘスティアとベルの二人は、日が完全に落ちるまでバベルの地下一階、ダンジョンの出入り口で座り込んでいた。

最初の方は立ちながら待っていたのだが、どうやらくたびれてしまつたらしい。

ベルはいい、問題はヘスティアの方だ。自慢のツインテールは地べたに着いてしまっている。

その上、ワンピースの服を着ているのにだらしなく座つてしまつては……彼女の下着が見えてしまいそうなのだが。

床の中央に空いた直径10Mほどの大穴、その円周に沿うように設けられた緩やかな階段から上がつてくる冒険者に、ロランの姿はまだ見えない。

「ねえ、神様？」

「何だい？ ベル君」

「何だか……下のほうが騒がしくないですか？」

「……聞こえるね。ダンジョンで何かあつたのかなあ？」

ヘスティアも耳を澄ませてみると、確かにざわついているような気がする。

その音が、段々と大きくなつていつている。もしかすると、ロラン君の身に何かあつたのか……！

い、いや。彼の力量があればそうそう怪我をすることだつてないはず。 大丈夫、きっと大丈夫だ。

不安を押し込めながらも、階段を注視してしまう。

やがて、現れた。

恐らく騒ぎの原因であろうその姿が。

その全身は——血に濡れていた。

元の色が分からぬほど赤く染まつた装備。

仮に頭の上に付けられたゴーグルをかけたとしても、レンズの上で赤黒く固まつてゐる血液のせいでの機能を果たすことは無いだろう。

脇に抱えた球状の物は何か分からぬ。

服から染み出したであろう赤い液体が正体の判別を困難にしている。

恐らく……石のようなものだらうか。

何よりも氣になるのは……背負つてゐる冒險者だ。

鎧を着込んだその姿もまた、血に染まつていた。

この世界では一番付き合いの長い主神であるヘスティアでさえ、判

別に暫しの時間かかつてしまつたほどに変わり果てた姿。

しかし、装備の形とその顔……顔もほとんどが血塗れであつたが……から、何とか口ランであることが分かつた。

彼女も、ダンジョンに出かける前の姿から変貌したロランの姿に動揺を隠せなかつた。

……出来れば、もうちよつとマシな眷属たちの初対面の方が良かつた。しかし、もう後には引けない――

「べ、ベル君この人が「ひ。」

「……ひ？」

ヘスティアがベルの顔を覗き込む。

その顔は、もう一人の眷属——ロランの真つ赤に染まつた顔とは対照的に、顔面蒼白であつた。

それは、まるで恐怖の根源や、強力なモンスターでも見たような顔で……

「人殺し―――――っ！」

……ベルの頭脳は、ロランが背負つてゐる冒險者を殺したものだと導き出したようだ。

よく考えれば、もし殺人をしたとしたら遺体はダンジョンに放置するだろうし、血塗れのまま帰つてくる訳ないだろう。

しかし、純粹な彼に、そんな血なまぐさい話題についての知識は、残

念ながら（？）無かつた。

ロランの見た目だけで判断してしまったようだ。

——後に、ヘスティア・ファミリアの新米冒険者が、仲間である剣士を殺人者扱いしたという笑い話が冒険者たちに、そしてその主神である神々にまで、今夜の内に広まってしまうことになる

彼らは、その剣士がオラリオにおいて最強の実力者であるという事実を、次に太陽が昇るまで知ることは無い……。

この騒ぎが収まつたのは、深夜になつてからであった。

バベルに常駐するギルド職員までもが呼び出される事態。

本来であれば、冒険者同士のトラブルには関わらないと決め込んでいるギルドまでが駆り出される大事件——結末はその実、大したものではなかつた。

剣士の背中に背負われた冒険者があつさりと目を覚ましたのだ。

ロランは職員に大雑把に事情を話し、意識を取り戻したとはい出血の多かつた彼を休ませるために、バベルに用意されている治療施設のベッドに寝かせてきた。

後は、彼が細かい事を説明してくれるだろう。

ロランは知らない。

十階層に、巨人のモンスターが現れたことは無いことを。

探索しつくされたはずの上層に、今まで見たことが無いモンスターが現れた事は決して『細かい事』の範疇には入らない大事であることを。

彼は、ダンジョンにも僕の知っているモンスターがいるんだなー、などと気楽に考えていたが、それは大きな間違いであつたことを

……。

「本当に、すいませんでした……」

「いや、仕方ないさ。僕も返り血とはいえ、血塗れだつたわけだし

……」

「返り血つ……！　いや、いや、ダンジョンで戦闘があつたら、それくらい普通ですよね……あはは……」

口ランに対して先ほどからずっと平謝りしている少年が、新しく眷属になつたベル・クラネルという子らしい。

口ランが見る限り、まだまだ冒険者となるには幼いような気もするが……自分が口を出すべきではない。

ベルもある程度は覚悟してこのオラリオに来たのだろうから。もしかすると、人には言えない事情もあるかもしれないのだ。

まあ、流石に人殺し呼ばわりされた時は驚いたが……。それよりも『仲間』、という存在を得られたことが嬉しい。

口ランにとって、その言葉は捨てたと思っていたものだから。

「僕はまだ未熟ですけど……よろしくお願ひします！」口ランさん

！――認められる、ということが……こんなにも嬉しい事だつたなんて……。

シャワールームで体と衣服に付いた血を落とす、リュックの中に詰まつたアイテムを換金するなどの様々な所用を終わらせた口ランたちは、三人揃つてようやく廃教会への帰途に着いていた。

その手には、大きな袋が抱えられている。

中には、およそ五十万ヴァリス……LV. 1の冒険者で組まれた五人パーティの一日に稼げる金額の二十倍、ヘスティアとベルは今まで見たことが無かつたような、そんな大金。

ギガンテスのから取れた魔石が二つに分かれていなければ、もつと高く売れていただろうと、換金所の職員は言つていたが……これ以上を求めるのは、高望みのような気がする。

「……口ランさんは、今日は何階層まで行つたんですか？」

「今日は……十階層までだね。今日のようなことが無ければ、次はもつと奥まで行けると思うんだけど」

「凄いじやないか！ 口ラン君、初めての探索でそこまで行けたのは多分君だけだろうね！……まあ、君ほどレベルが高い新人の冒険者も今までいなかつただろうけど」

「そ、そうでしょうね……。あ、生活費に幾らかお金を渡した方が良いですよね。拠点に戻つたら渡しますね」

「あ……ありがとうつ！　ロラン君！　とつてもとつても助かるよつ！」

こんな夜遅くにお腹が空いても、いつもなら賄いのジャガ丸ぐんで済ませてしまうけれど、今日はロランの稼ぎがあるから余裕がある。遅いから店も開いてないし、時間も無いから手間のかかる料理は出来ないけれど、魔石を使つた食料保存箱に残つてている材料で頑張つてちよつとした夜食でも作つてあげようかな……とヘスティアは決意する。

「ロランさん、後で今日ダンジョンに潜つたときのことを教えてくださいね！　参考になるかもしないですから」

「僕も聞いてみたいね！　僕の眷属で、ダンジョンに挑戦したのは君が一人目だからね！」

「……僕が初めての眷属でしたよね、ヘスティアさん。そりやあ僕が一人目になると思うんですけど」

「うつ……。それは言わないお約束だよロラン君……」

笑い合いながら、夜も更けた街を練り歩く。

ロランは、このささやかな幸せを噛み締めていた。

普通の人だったら当たり前に存在するだろうこの幸福……仲間と語らい、共に助け合う。

(……化物のような存在になつてしまつたら、力を見せてしまつたら壊れてしまふかも知れない、この儂い絆を、僕はもう少しだけでも繋いでいたい。)

——自分の過去を話してしまつたら、力を見せてしまつたら壊れてしまうかも知れない、この儂い絆を、僕はもう少しだけでも繋いでいたい。

三人揃つて廃教会への扉をくぐる。

確かに、拠点はボロボロで眷属もたつた二人しかいない、大手のファミリアからしたら鼻で笑われるようなファミリアかも知れない。しかし、一人は頑張り屋で可憐な女神。

もう一人は、オラリオ最強の勇者。

そして、最後の一人は——ま、まあ、まだその実力は発展途上中ではあるが、志は高くその目標は英雄。

このファミリア——ヘスティア・ファミリアなら、きっとオラリオのファミリアにだつてなれる。そんな気がするのだ……

「ああっ！ もう食材が残つてないよ、一人とも！」

「えっ!? 横、今までダンジョンにいて、何も食べてないんですよ！ ヘスティアさん、この時間までやつてる料理屋知つていませんか!? 「僕たちも口ランさんを待つていて、何も食べていなかつたんですねよ!? ど、どうしましよう、神様!? もう、お腹ペコペコですよ～」「こんな夜遅くまでやつてる店なんて無いよ！ ど、どうしよう。もう賄いのジャガ丸くんも残つてないし……」

……前言撤回、そんなことは無いかもしね……。

明くる朝、食料品店が空いたであろうタイミングを見計らつて買い出しに出かける。

その姿は……白髪赤目の中年、ベル・クラネルだ。気落ちしているのかその背中は曲がり、青白い顔を朝の空気に晒しながら空きつ腹を抱えて歩くその姿は、どこか悲壮感溢れるものであった。

お金なら渡されている。

食料を買うには明らかに過ぎた金額だ……出来る限り多く買つてきてくれ、と伝える二人の姿も消耗しきつていていたようであつた。さしもの勇者も、そして女神でさえ、生理的欲求である食欲には勝てないらしい……。

お目当ての店に辿り着く。

そこの女店主は、少年が買う量に驚愕していたようだが、そんなことは関係ない。

冷蔵庫にも入りきらないだろうが……まあ、今から食べる量を考えたら、何とか冷蔵庫に満杯程度に減らすことが出来るだろう。急いで廃教会に向かう。

ダンジョンに潜り、当面の生活には十分すぎるヴァリスを稼いでく

れたロランさん、眷属にしてくれた神様。何もしていないのは、僕だけだ。

彼らに何かをしてあげるために、この買い出しに行くのだと立候補したのだ。

早く帰つて、美味しい料理を作つてあげよう。

女手のいない家庭で、祖父と二人つきりで過ごしていただのだ。

料理だつて少しくらいは出来る。空腹を我慢して、駆け足で帰宅する。

廃教会までの入り口まで来たところで、中で何かを話していることに気付く。

ロランさんと神様が二人でいるとき、どんな話をしているのか気になつてしまふが、今はそんな好奇心を優先すべきではない。

……ベルだつて、もう空腹が限界なのだ。

その傾きかけた扉を……少し乱暴だが、足で開ける。両手が荷物でふさがつてしまつてゐるからだ。

しかし、そこにはヘスティア・ファミリアの二人以外に、見知らぬ美女がいた。その手には……確か、ロランが背負つていた剣を握りしめ、食い入るように見つめている。

赤毛のショートカット、右目に眼帯を付けて いるその『女神』の名を——ヘファイストスといった。

第五話

——ヘファイストスは激怒した。

かの無知蒙昧なる親友を叱らねばならぬと決意した。
その名は……ヘステイア。

下界に降りてきただばかりの彼女の面倒を見ていたが、自分のファミリアの拠点で怠惰な生活を送り続けた罰として、着の身着のまま放り出した女神だ。

まあ、拠点と当分の生活のためのバイト先くらいは紹介してやつたのだが。

眷属も連れず、その美脚はヘステイア・ファミリアの拠点である廃教会に真っ直ぐ向かっている。

何故、ヘファイストスが激昂しているか。

その理由は、今朝の内にオラリオ中に広まつた噂……事実ではあるのだが……まるで嘘のような話の所為である。

——オラリオに、突如レベル二桁到達者が現れた。それもダンジョンの中でレベルアップしたものではなく、その男は都市外からやって来たのだという。

この話の出所は、何のことは無い。

ギルド前に設置された掲示板である。

ここには、ギルドに報告された冒険者たちのレベルアップの情報

や、新たに登録された冒険者のレベル情報が載せられている。

ヘファイストス・ファミリアは鍛冶を目的とするファミリアである。

冒険者を相手とする組織ではあるが、レベル自体はあまり関係がない。しかし、一応所属する鍛冶師に掲示板を確認して貰っている。何故なら、親友のことが心配だつたのだ。

おつちよこちよいと、少しそそつかしい彼女のことだ。もしかすると、バイトをクビになつて路頭に迷つているかも知れない。

追い出した手前、自分から会いに行くことなど許されないだろうが……今回ばかりは話が別だ。

L.V. 10の冒険者が駆け出し、いや、冒険者が今までいなかつたことから、それ未満だと言えるヘスティア・ファミリアに入ることなど、余程の奇跡が起こらない限り有り得ない。

ヘファイストスが話を聞く限りでは、彼女のファミリアに今まで、L.V. 1冒険者の一人でさえ所属したという話は聞いたことが無い。

それが、昨日の今日になつてオラリオ最強の戦士がオラリオに新人冒険者として現れ、同じく新参ファミリアの眷属になるなんて……話が出来過ぎてている。

ヘスティアのファミリアに所属したという新米冒険者、L.V. 1のベル・クラネルの名前も彼女は確認している。

まあ、彼については特に問題ないだろう。

それより、巷で噂のL.V. 10冒険者——ロランのことについて、ヘスティアに問いたださなければならない。

彼女に何の目的があつて嘘をつくような真似をしたのかは分からぬが……。

——ヘスティア、ましてやロランが虚偽の報告などするはずもない。

しかし、ルビスの起こした奇跡が、鍛冶の神をも惑わせていた……。

ヘファイストスが廃教会に到達する少し前、空腹に苦しむロランは済ませなければならぬことがあつたのを思い出す。

ギガンテスとの戦闘で使つた口トの剣の手入れだ。

返り血が付着したその刀身自体が余りに滑らかなため、血振りさえすれば血糊を残すことは無い。

しかし、気分的に拭いておきたかった。必要性は無いが、何となく不潔な感じがする。

「ヘスティアさん、何か布はありませんか？ 剣の手入れをしておきたいんです」

「うーん、確かにそこの引き出しに要らない切れ端があつたような……」
ロランはひきだしを開けた！ なんと、ぬののきれはしをみつけた！

「これ、使つて良いですか？」

「……いいよー」

ロランがそれを見せながら問う。

ヘスティアがちょっと前まではテープルクロスとして使っていたものだ。

心なしか、ヘスティアの返事に霸氣は無いが……古くなつて切り分けたその布を手に入れることが出来た。

剣の手入れと言つても、砥石を使う訳でもなければ、ましてや刀用の打ち粉を使う訳でもない。

というよりも、使う事が出来ない。並の砥石如きではオリハルコンの刀身を僅かに削る事すら敵わないのだ。

アレフガルドの地を恐怖の渦に叩き落とし、光を根こそぎ奪うという神話級の偉業を成し遂げた大魔王ゾーマですら、オリハルコンの剣を破壊するだけで三年も掛かつたことから、オリハルコンという金属の凄まじい硬さが分かることだろう。

切れ味が落ちることも滅多にないので、たまについた汚れを落とせば、それで十分なのだ。

ロランが刀身を拭うために抜刀する。

その抜き身の刀身が放つ神秘的とまでいえる美しさ、そして鋭利さは、例えオラリオを隅から隅まで探したところでこれ以上のものが見つかることは無いだろう。

刀身だけではない、その半円を模したように弧を描く黄金の鍔も、中心と柄頭に埋められた宝玉もまた、その剣の美しさを増している。しかし、決して装飾過多という訳ではない。

実用品としては勿論、美術品としても超一流だといえる一振りであつた。

……流石に、武器とは何ら関係ない女神のヘスティアでもロランの持つ剣が凄いものだということは理解できたようだ。

抜かれた剣の刀身を見て、思わず感嘆の声を漏らしてしまう。

「うわあ……綺麗な剣だねえ……。一体、何処で手に入れたんだい？ それとも、買ったの？」

「いや、これは……譲つてもらつたものですよ。とある高名な方から頂いたものです」

……一応、本当のことだ。一度は世界を手中に収めた龍の王のひ孫なのだから、有名だろう。

世界で五本の指に数えられるくらいには。ハーゴンを倒したのに、重要なことを教えてくれたお礼に行つたら、まさか……

「……竜王が、リュウちゃんなど呼んでくれつて言うとはなあ……」「何か言つたかい？ 口ラン君？」

「……いえ、何も」

……剣拭くだけなのに、なんでこんなに疲れを感じているんだろう……？

その疲れは、今はもう果ての世界に住む一人の奇妙で、妙にフランクな友人に起因することに間違はないだろう……。

そんな折、扉をノックする音が聞こえた。

「ああ！ ベル君が帰つて來たんだよ、きつと！」

「ようやく、ご飯が食べられるのか……！」

二人の顔が喜色に染まる。

遂に二人は、この空腹の苦しみから解放される時が来たのだ……。希望に満ちた目で隠し扉が開くのをじつと眺める。

しかし、期待に反して入つてきたのは、口ランは知らない、ヘスティアにとつては既知の間柄である赤毛の女神、ヘファイストスであった。

その視線はヘスティア・ファミリアの二人ではなく……口トの剣に注がれていた。

しばらくの間、彼女は固まつていた。まるで信じられないものを見たかのように。

「久しぶりじゃないか！ ヘファイストス……あつ、そうだ！ 僕にも遂に眷属が出来たんだよ！ ほら、口ラン君、自己紹介してあげて！」
「え、ヘスティアさんの知り合いなんですか？ ……ええと、僕は口ランです。ヘスティア・ファミリア所属の冒険者をやっています」
「え、ええ、私はヘファイストス。鍛冶ファミリアの主神をやつている

の。……ところで、その剣は、何なのかしら?」

ロランの胸がざわめく。

このロトの剣は、隠しようもない大業物だ。こんなものを鍛冶の神に見られてしまつたら、後でどんな噂をされるか分かつたもんじやない。

誤魔化すように、その刀身は鞘に納める。

しかし、一度見られてしまつた以上、もう遅い。

今更隠すことも出来ない。仕方なく、ロランはその銘を告げる。

「……これは、『ロトの剣』という剣です」

「ふうん? ロトっていうのは、それを造つた人の名前なのかい?」

「……た、確かに『神に近き者』って意味だつたと……」

ヘステイアの質問に、まさか、伝説の勇者の称号だと言えるはずもない。

慌てて思い出した幼い頃読んだ古書に記載されていた意味を答えるしかなかつた。

「……もしよければ、その剣を見せてくれないかしら。出来れば、手に取つてみたいのだけど」

「ええ! ……か、構いませんけど……」

ロランは渋々ロトの剣を鞘ごと手渡す。

ヘステイアの知り合いである女神の頼み事だ、断つてしまふのも気が引けてしまつた。

……どうやら、鍛冶の女神様はロトの剣に興味津々のようだ。
(せめて、僕のことと言ひ触らさないよう頼むしかないか――)

ヘファイストスが剣を鞘から抜き放つ。

その輝きは、何故かロランが持つていた時よりかは鈍つているように見えた。

「……確かに、噂のLV. 10冒険者に相応しい剣のようね」

「……噂の?」

聞き捨てならない単語を聞き返したところで――再び、扉が開く。

「ただいま、帰りましたー!」

「ベル君!? お帰りなさい! 食材は買つてきててくれた?」

「ええ、もちろんです！ ほら！」

抱えた袋には……溢れんばかりの食料。

ロランとヘスティアにとつてはまさに垂涎の品々である。

「ええっと……貴方は？ 何でロランさんの剣を持っているんですか？」

「私はヘファイストスよ。ヘスティアの友人であり、鍛冶を司る女神でね、この剣が気になつたのよ」

ベルの瞳もロトの剣の輝きに惹かれて、目が釘付けになつてしまつた。しかし、それよりも彼にはやらなければならぬ使命がある……！

「それより、今から料理しますね！ 二人は立て込んでるみたいだし……」

「ありがとう！ ベル君！ ああ……今の僕には君が救いの神のように見えるよつ！」

「神は貴方でしょ……ヘスティア……」

「……しつかし、この剣は凄まじいわね、オリハルコンの刃なんて……」

ベルが野菜、肉などの様々な食材を切り、魔石を使用した調理台で煮込む音を背景に話は進む。話題は勿論、ロトの剣である。ヘファイストスの言葉を聞き、驚愕のあまりヘスティア、ベルの二人が噴き出す。……その時、ベルは何とか鍋から顔を背けることが出来たようだが。「お、お、お、オリハルコンつ！ そんなの、ダンジョンでもほとんど見つからないような金属じやないかつ！ ロラン君はそんな剣を持つっていたのかい！」

「ええ、まあ……」

ベルは調理に追われているため会話に参加することできないが、ヘスティアは別だ。

ロランの剣を凄いものだ、とは知つていたがまさかこれほどまでとは。しかも、鍛冶の女神ヘファイストスのお墨付きである。名実ともに凄まじい剣であることは間違いないだろう。

……ますます、ロラン君の過去に興味が湧いてくる。

簡単に踏み込んでいい領域でないことは理解しているけど。

「この『ロトの剣』は神造の武器と比べても大差ないわ。私がこれ以上の剣を打て、と言われても出来るかどうか……」

——この一振りは人間が神にまで限りなく近づいた、そして、持つ人間が神に迫るための剣。

これが間違いなく人が打つものだとヘファイストスは断言できる。

しかし、そのことが信じられなかつた。

これほどの攻撃力を持つ剣を造れる者は、少なくとも鍛冶ファミリアの中でも随一の腕を誇るヘファイストス・ファミリアの鍛冶師たちにはいない。

まさに、神に近しき一振りと呼ぶに相応しい剣だ。

「やつぱり、凄い剣だつたんだね……。ヘファイストスにここまで言わせるだなんて……」

「そうね……もしも売却したら、十億ヴァリスは下らないと思うわ」

「じゅ、十億つ!? そんな金額、想像もつかないなあ……」

「……それよりも、噂のL.V. 10冒険者つてどういう事なんですか？」

?

ベルが器にスープを盛り、焼いたパンをカゴに詰めている。

待望の朝飯はもうすぐだが、ロランには聞かなければならぬことがあつた。

もしも、自分が噂されるようなことがあれば、かなり面倒なことになる。

闘うことはまだいいが、自分のことを……特に、過去を詮索されることは良くない。

「ええ、もうオラリオ中の人と神に広まつてていると思うわよ。初のベル二桁到達者が、都市外からやって來たつて。私は、最初はヘステイアが嘘の報告でもしたのかと思つてきたんだけど……この剣を見せられちゃつたらね……。確かに、君はオラリオ一の剣士に違ひないね」

……もう、自分の名が広まることは諦めるしかないようだ。

口ランは深く、それはもう深くため息をついた。

これは、ヘファイストスの推測ではあるが、ロトの剣は限られた者しか真の力を発揮することが出来ない類の武器だろう。

その人物が彼、口ランであることは誰の目にも明白だ。

あの剣に認められているのだ。

彼が、オラリオにいるどの剣士よりも高みに立っていることは、鍛冶しか知らぬヘファイストスでも分かる。

普段の彼女なら、使い手を選ぶ武器など邪道だ、と切り捨てていたかもしだれないが、ことロトの剣に関しては、それが自然なことのように思えた。

彼女の推測は間違っていない。

ロトの剣は真の勇者にしか振ることを許されず、太古の昔から多くの邪悪を切り裂いてきた。

世界のどこかにあると言われる『不思議なダンジョン』を探索する太った商人と、幼き頃の元山賊の戦士などを除いては……。

ベルが具がたっぷりのスープを入れた器とパンを詰め込んだ籠を持って、台所から現れる——待望の朝ご飯だ。気持ちを切り替えていこう。

「神様、口ランさん、ご飯出来ましたよ！　お口に合えばいいんですけど……」

「おおっ！　待つてました！　美味しそうだねえ、ほら、口ラン君も早く食べよう！」

「いただきます！　……もしよければ、ヘファイストスさんもどうですか？」

「それじゃあ、ご相伴にあずかるうかな……いいの？　ヘスティア」「大丈夫だよ！　今のヘスティア・ファミリアにはたんまり貯蓄があるのさ！」

ふつくらとした小麦のパンを、温かいスープで空いた腹に流し込む。

廃教会の、賑やかな朝が過ぎてゆく。

……次に訪れるは、少年の旅立ち。ベルが、初めてダンジョンに入
る時が来るのだ――

第六話

——賑やかな朝食の時は終わった。

何気無い会話をして、同じ食卓を囲む。

それは、彼らと魔王征伐の旅をしていた時以来の……。

ロランは頭を振つて、頭に浮かびかけたことを追い出そうとする。

一番大切なものであると同時に、トラウマでもある忌まわしき記憶。

ベルが食器を洗う水の音、力チャヤ力チャヤと皿が擦れる音がいやに大きく聞こえる。

「それじゃあ、私はホームに戻らなきやいけないから……」

「またね、ヘファイストス！僕のファミリアの活躍を楽しみにしておいてくれよ！」

「はいはい……あ、そうだ。ロラン君、ちょっと来てくれる？」

「はっ、はい！ な、何の用でしようか……」

……考え事をしていた時に、急に話しかけられて、思わず声量が上がつてしまつた。

ちよつと恥ずかしい……。

ロランは、廃教会の隠し部屋に繋がるドア、その前に立つ女神の傍に歩み寄る。

その瞳が、僕に対してもどのような感情を向けているかは分からない。しかし、何か言いたいことがあるようだ……。

瞬間——ヘファイストスが、ロランの頭を抱き寄せた。

ロランの頭が混乱する。

何故？ どうして？ 何のために？

その時、彼女が彼の耳元で囁いた。

「大丈夫、君がしたことは詳しくは知らないし、聞かないけど……人を恐れることは無いわ。貴方のしたことは、決して間違つたことではないんですよ？」

赤毛の女神は颯爽と、扉の向こうにその姿を消した。

鍛冶の女神は見抜いていた。

刃に残る微かな闇の気配から、ロトの剣が切り裂いた邪悪の大きさを。その力がきっと彼女たち——神々に匹敵するであろうことをも。

彼の瞳に時折宿る闇が、その事に起因するものであることを。

武器は、扱う人の姿を映すという。

鍛冶を司るヘファイストスは、その言葉をきっと他の誰よりも理解している。

邪悪であれば、全てを切り裂くことすら可能であろうロトの剣を扱える者の行うことが、人々に恨まれるようなことははずが無い。

——ロトの血脉より生まれし命、それは人々と常に共にある命でもあるのだから。

(……敵わないなあ)

と感じてしまう。

ロランの使つていた剣を見ただけで、ここまで見抜かれてしまうなんて彼には思いもよらなかつた。

きっと彼女は、ロランという剣士が過去に戦つた者について薄々気付いていることだろう。

これも、神と呼ばれる存在だからこそ出来ることなのだろうか?

……ある意味、彼女は見当違いをしている。

彼の成した破壊神殺しは、どんな人々の眼から見ても正しいものであつた。

しかし、彼にとつて大事なことは自分の力を認めてくれること。

普通の、力を求める冒険者たちが考え付くようなことではない、ロランの人外じみた力を知つた上で、自分自身を認めてくれたこと——それが、嬉しかつた。

「あーっ！　ヘファイストス！　僕の大切な眷属を口説かないでよ！」

「えっ！　ロランさん、ヘファイストス様と何かあつたんですか!?」

——たつた一日や二日の仲だけど、それでも、僕が守らなければいけない大切な仲間たちだ。

何といっても、女神様の励ました、それに見合う働きはしなくては

ならないな……。

「ちよつとどういう事だいロラン君！ いくら親友のヘファイストスとはいえ、他の女神の色香なんかに騙されないでよね！」

……働く前に、何とかこの誤解を解かなければならぬが。

ヘファイストスが去つた後、ヘスティア・ファミリアの面々は先ほどまで食事をしていったテーブルに向かい合つていた。

今日の予定を話し合う、言わばファミリア会議を行うためだ。

この話し合いをするまでに、誤解を解くためロランが多大な労力を要した、という事だけ伝えおこう。

二人とも結構思い込みが強い性格だつたのが彼にとつての不幸であつた。

「それで、ベル君は初めてダンジョンに潜るんだよね……不安だなあ……」

ヘスティアの気がかりも当然だ。

ロランとは違い、ベルは素人もいいとこだ。

彼女から神の恩恵を受けたとはいえ、戦闘の技術に関しては未熟。歴戦の剣士であるロランとは比べべくもない。

「それじゃあ、僕がついて行きますよ。教えられることも少しはあると思います」

「いいんですか、ロランさん？ ファミリアの資金とか、大変なんじやあ……」

「いや、昨日の稼ぎで当分は持つと思う。数日くらいなら、ダンジョン探索しなくとも平気さ。……それに、君はモンスターと戦闘なんてした経験なんて無いだろう？ 万が一、ということもあるからね」

「そ、そうですね……。それならロランさん、今日一日よろしくお願ひします！」

『戦闘』という言葉にベルの顔が青くなる。

万が一ということは、要はベルがモンスターとの闘いで死に瀕することを表している。

ソロでダンジョンに入る時、例えどれ程手練れの戦士であろうと付

き纏う危険。

それは、リカバーをすることの出来る味方が傍にいないということだ。負傷し、逃走する際ににおいても、敵を引き付けてくれる仲間がないなければ、成功率は大幅に下がる。

治療、地理情報の把握、戦闘、その他様々なダンジョンにおいて必要な行為を全て一人で行う……LV. 1の駆け出し冒険者が本来出来るようなことでは無い。

しかし、ベル・クラネルが眷属として所属するヘステイア・ファミリアは、残念ながら零細だ。

大手からすると、吹けば飛んでしまうような規模の組織である。

そんなファミリアに好き好んで入るような人は、今のところはいない。LV. 10冒険者のロランが入ったことにより、少しは改善されるかもしれないが……。

かといって、レベル差の激しいロランとベルでパーティを組むことは非合理的と言えるだろう。

何しろ、たつた一人しか眷属がないのだ。ファミリアの運営は慈善事業ではない。

ダンジョンに入るだけでも、傷を癒すためのポーション、武具・

防具の購入……決して安いとは言えない費用が掛かるのだ。

となると、二人はお互いソロでダンジョンに挑まなければならぬことになる。

ロランは問題無い。

しかし、新人冒険者であるベルには出来るだけ教えなればならないことがある。

今までの冒険で培つてきた、生き残るための術を。

「それじゃあ、僕はジャガ丸くんの屋台でバイト！ ロラン君とベル君はパーティーを組んでダンジョンの探索！ 今日も一日、頑張ろうねっ！」

女神の激励を合図に、少年の迷宮英雄譚が今日より始まる——かもしれない。

「や……やつたつ！やりましたよ！ロランさん！」

ここはダンジョンの一階層。

先日、ロランの頭を悩ませた横幅の広い通路である。

そこに現れた一体のモンスター……ゴブリン。

ロランが戦った感覚からすると、この迷宮の中で最弱のモンスターだ。ただ、その事実をベルに伝えて彼の喜びに水を差したくなかった。

ゴブリンを数回斬り付けて倒した武器……ギルド支給品のナイフ。刃渡り二十センチ程の何の変哲も無い、あまり威力は無さそうな短刀と、同じく支給品の安い防具をベルは装備している。

基本的には、人体の中でも一番の急所である胸の部分だけを金属のプレートで覆っている。

鎧というよりかは、寧ろ服に近いだろう。

恐らく、ロランの着ているローレシアの職人謹製の装備に比べれば、防御力は随分と落ちるだろう。

この装備は、ただの『ぬののふく』のようにも見えるが、其の実は違う。

たとえ稻妻の呪文を受けたとしても、焦げ一つ付かない頑丈な代物なのだ。……流石に、『ロトの鎧』には劣るものだが。

ベルの太刀筋は明らかに素人だ。

剣を自在に振る筋力も無かつたことから、リーチは短くても軽いナイフを選択しなければならないほど、戦闘に慣れていない。

しかし、それでも一階層くらいのモンスターの強さであれば、複数体に囲まれることさえなければベルでも問題なく倒せるだろう。

ベルがモンスターを倒すことが出来ているのも、もしかすると神の恩恵のおかげなのかもしれない。

(……一階層から三階層くらいまでなら、ベル君がソロでも潜れるかな？)

「ロランさん、あの辺りに何か変なものが見えませんか？」

考え事に耽り過ぎてしまつたらしい。

異変の接近にも気付かないなんて……。

彼が指示する方角を見る。

その時、壁の影からその姿を現す。

青く、半透明なプルプルとした肉体。大きな二つの目……スライムだ。

「おかしいな、昨日の迷宮にはスライムなんて出なかつたのに……」

「あれもモンスターなんですか？それにしては……その……随分可愛らしいような……」

「あのモンスターはあまり強くはないんだ。もう一度、戦つてみなよ」「はいっ！」

たかだか一時間余りで蚊トンボを獅子に変える、モンスターからの勝利とはそういうものだ。

勢い勇んでベルがスライムに向かつて突撃する。

しかし、ただ黙つてやられるスライムではない。

ベルがナイフを構えてまつすぐ進んできたのに対し、カウンター気味に体当たりを食らわした。

ベルの肺から強制的に空気が排出され、口からくぐもつた呻き声が漏れてしまつた。だが……動けない程ではない！

右手に持つたナイフで、ベルの胴体にぶつかつた反動で吹き飛ばされたスライムを十字に切り裂いた。

横に一閃、硬直したところを縦に一閃。四つに分かれたその体を維持できるはずも無く、スライムの力の源であつた魔石が床に落ちる硬質的な音が、ダンジョンに小さく響いた。

ベルにとつては激戦の最中、ロランは違和感を感じていた。

スライムが、昨日だけ偶然姿を現さなかつたとは考えにくい。

一階層でかなりの回数戦闘を行つたが、スライムとだけは会わなかつた。

つまり、この階層に突然スライムが出現するようになつたと考えるのが自然だ。

——いつの日か、このダンジョンを探り続けていれば違和感の原因も分かるのだろうか。

……それよりもまずは、先達として新米冒険者の失態を叱らねばな

るまい。

「ベル君、油断し過ぎだ。いくら小さいからって、君の命を奪いに来る怪物たちなんだ。結果的に倒せたから良かつたようなものの……」

「ケホッ……心配かけて、すみません、ロランさん」

咳き込みながら、痛みによつて涙目になりながら答える。

きつとベルは勝利の甘い余韻から一転、まだまだ未熟なのだと自分が思い知らされた気分なのだろう。

彼の涙は、案外痛みだけから出ているものではないのかもしだい。

……突如、ロランの頭が良いアイデアを思い付いた。

「ベル君、もし君がよければ僕が稽古をつけてあげようか？」

「えっ！ そんなことして貰つても良いんですか？ 迷惑になつてしまふんじや……」

「構わないさ。……何せ、君と僕は仲間なんだから」

「……はいっ！ よろしくお願ひします！」

ベルの顔が一転、喜びの表情に変わる。

それも当然だろう。自分よりも一回り、二回り上の実力を持つ剣士に仲間だと認められていたのだから。

しかし、後にベルはこの申し出を簡単に受けたことを後悔することになる……。

ベル・クラネルは幸運だつた。

モンスターの群れに遭遇することが無く、多くても三匹ほどのゴブリンの集団にしか遭遇しなかつた。

その時は死に物狂いで逃げながらも、何とか倒すことに成功した。その姿をロランは見るだけであつた。

今回は、あくまでベルが単独でモンスターとどこまで戦えるのかを確認するためだ。

(……なんで、ロランさんはモンスターに襲われないんだろうか。)

そして、運が良かつたとはいえ、遂に三階層目まで到達したのだ。ロランという強力な仲間が見守つていたとはいえ、初めての探索で

この結果は快挙だといえるだろう。

「ここからが三階層だよ、ベル君。……そろそろ、戻ろうか？」

「……そ、そうですね。もう、大分キツイです……」

「これから一人でダンジョンに挑む時は、もつと余裕をもつて帰路に着かなきやならないからね？」

この時、ベルはロランがいることにより、余計な責任を感じていたのだ。

実力の高い剣士が見守ってくれているのに、限界だとはなかなか言い出せなかつた。

彼の目尻には既に涙が溜まつてゐる。

今回の涙は、混じりつ氣無しの過剰な疲労のせいである。

ロランはベルの後ろに立つて彼を見ていたことから、溜まつた疲れには気付かなかつたらしい。

（仕方ない、帰り道の戦闘は僕が引き受けるか……。）

そう思つたところで、モンスターの姿が見えた。あの青い姿は……スライムだ。

「ベル君、あのスライムを倒してから帰ろうか。後を追いかけられると面倒だ」

「……僕がやります。スライム一匹くらいなら、まだ戦えそうですが両目をスライムの方向に戻すと、一匹ではなくなつていた。

何時の間にかその数が増えている。合計、八匹。

一体、いつの間に仲間を呼んだのだろうか……？

二人が驚いている内に、八つの影が一つに集まつていく。

二人はさらに驚愕する事となつた。

この現象は、スライムというモンスターを知つていたはずのロランですら見た事が無い。

彼らが、正体不明の光を放つ——

——なんと、スライムたちが……!?

合体してキングスライムになつた！

王冠を被つた巨大なスライム、一目見ただけで、スライムの上位に位置するモンスターであることが分かる。

その豪華な冠から判断するに、スライムの王様のような存在なのだろうか？

「ろ、ろ、ろ、ロランさん！　ダンジョンのモンスターって、合体なんてするんですかーっ！」

ベルは、混乱している！

予測すら出来なかつた事態に直面して、ロランに助けを求める。

その姿は……何だか、情けなかつた。

一方、ロランは戦闘態勢を整える。

一度も見た事のないスライムだ。油断は出来ない……が、手に取つたのはロトの剣ではない。

バベルに開設されている、ヘファイストス・ファミリア支店で購入した片手用の鋼鉄製の剣。

その鐔は半円を模したナックルガードになつてゐる。

お値段、一万五千ヴァリス也。

その見た目は、ロランが使用していた『はがねのつるぎ』に酷似していた。

背負つた剣を見て、何故新しい剣を買うのかと売り子さんも困惑していた。

ロトの剣があるのに、なぜそれを買うのかとベルにも聞かれた。その時は適当に誤魔化したが、購入した目的はただ一つ。

——ロトの剣では、攻撃力が高すぎる。

下手にベルを巻き込みかねない破壊力を持つ剣を、一時とはいえパーティを組んだ状態で振り回したくはない。

しかし、自分の格闘術だけではベルを守りきる自信は無い。

この苦悩の結論が、新たな剣を購入する事だったのだ。

キングスライムが、無防備であり、より近くに居たベルにのしかからうと飛び上がる。

その巨体とは裏腹に動きは意外にも俊敏だ。

少年は、動くことが出来なかつた。

それは、巨体に襲い掛かられる恐怖による身体の硬直か、展開のあまりの速さに逃げることすら出来なかつたのか、それとも両方か

……。

——ベルの襟が掴まれ、投げ飛ばされる。

助けられたのだと理解できたのは、尻餅を付いた衝撃を感じた後だ。

その瞳に映るのは、今にも巨体に押し潰されそうな、仲間の姿——逃げてください、その一言を発することが出来なかつた。

……正直に言うと、口ランの動きに見惚れてしまつたのだ。

まさに、開いた口が塞がらない状態である。

口ランが放つ技は、元は口ト流剣術——口ランのいた時代では、古流剣殺法と呼ばれる流派の究極奥義が一つ。

——鳳凰十文字大切断

紛い物とはいえ、竜の王すら軽々と切断する一撃——いや、二撃。スライムの王など、物の数にも入らない。十字に敵を切断する様は、真空の刃を十字架として放つ『グランドクロス』と呼ばれる技に限りなく近い性質を持つ。

この奥義は、先程ベルがスライムに向かつて放つた苦し紛れの斬撃とは天と地ほどの差がある。

真空を、己が剣のみで創り出す。

その絶技は、ある意味異常な技量を身に付けた者にのみ可能となる。

……これを成し遂げる者を、少年はこの口ランという男しか知らない。

ダンジョンの中という状況で、共に行動することでベルは気付くことが出来た。

彼が、常に人々を助ける、英雄であったことを。

彼の力を、今のように自分の危険を顧みずに、人の為に振るつてきたのだということを。

そう確信させるほどに、彼の動きに躊躇が無かつた。

保身を考えず、人を救う——それが、どれほど困難なことだろうか。

……今になつて、ようやくベルは知ることが出来た。

彼こそが、僕の憧れる『英雄』だったのだ。

第七話

モンスターの合体という予想外過ぎる出来事もあつたが、今日のダンジョン探索は終わりを迎えた。

帰り道の敵の掃討を担当したのは、言うまでもなくロランである。

キングスライムの突然の出現は、ベルを肉体的、精神的にも大幅に消耗させた。

当然のことである。上層にはあまり強いモンスターが存在しない上に、ロランの庇護もあつた。

複数体のモンスターから襲来も無かつたことから、命を危険に曝される感覚を味わう事が無かつたのだ。

——初めて死に直面する事態は、少年にはとても堪えたように見える。

ダンジョンを急ぎ帰る途中においても、一言も言葉を発することは無かつた。

口から出るのは荒い呼吸だけ。しかし、内心では興奮していた。その理由は、ロランの剣技をその目で見ることが出来たから。

ロランの剣の前に立つには力不足だと思われる敵だが、それでも憧れ続けた英雄を実際に目に見る機会など、オラリオに来る前では絶対に来なかつたであろう。

ロランは英雄の中でも飛び切りの存在である。

その男と同じファミリアであるという事、仲間だと認めてくれた事、自分に稽古をつけてくれると言つてくれた事……。

確かに、まだ心中の片隅に恐怖は残つてゐる。

しかし、ダンジョンを少しばかり攻略したのだという奇妙な充足感と、ロランに対する憧れ……そして、期待が迷宮の入り口に近付くにつれて高まつていつた。

道中で、注目すべきことは無かつた。

強いて言うなら、自身が使い慣れた武器を、適度な殺傷力で振るうことの出来る鋼鉄の剣の存在にロランが再度ありがたみを感じた程

度である。後は、如何にも簡単に敵を屠つてゐるよう見える……
その実、魔物との戦闘に関する技術の集大成であるロランの戦いを、
英雄譚としてではなく、実物として見ることが出来てベルが喜んだこと
とくらいか。

……異変が起きたのは、ダンジョンの外に出た後である。

バベルの内周に設置された階段を上りきり、ロランの姿が衆目の前に現れたその時……人々がざわめき始める。

人数自体はとても少なかつた。それもそのはず、殆どの冒険者たちは午前までにダンジョンに入ってしまう。

この、正午を僅かに過ぎた時間にバベルの入り口にいる冒険者は、何か問題が起きて、帰還した者が大多数を占めるだろう。

その少ない人数であつても、ロランたちに自分らが注目されていることを理解させられるほど、大きなざわめき……その事態は、既にロランの顔が知れ渡つていることを意味する。

(……ベル君を変な騒ぎに巻き込んでしまうのは拙い。)

そう判断したロランは、彼と別行動を取ることを決意する。

「……ベル君、君は換金所でアイテムを売却して、ヴァアリスを拠点に持つて帰つてくれ。僕は、ギルドに行つてダンジョンで起きた事を話していくよ」

「わ、分かりました……気を付けてくださいね、ロランさん」

ベルも、自分ではなくロランが注視されていることくらいは分かる。

彼のことは心配だ、だけど何か問題が起きた時、自分はいても邪魔になるだけだ……。

ロランはそそくさと人の眼から逃れるようにバベルから退出し、ギルドへと駆け足で向かう。

ベルは階段を上り、彼らの成果である魔石をお金へと変えるため、換金所に向かう。

……この後、ダンジョンなど比較にならないかもしない次元の苦難がロランを襲い掛かることなど、占い師でもない勇者には知ることは出来ないだろう……。

華美な剣、盾、そしてシンプルながらも上質な武器であると感じさせる剣を背負う背中に人々の視線が突き刺さる。

……まさか、ここまで早いとは思つていなかつた。

レベルを公表されるのが朝だつて言つていたから……半日で、僕の顔まで広まつてしまふなんて……。

人の多い往来に出たことを大きく後悔しながら、深く溜息をついた。

最近になつて、溜息の回数が増えたような気がする。

最悪、過去さえ広まらなければいいのだが……それでも、人に注目されることはあまり気持ちの良い事ではない。

王子として、次期国王として多くの人に見られていた時とは違う。人に詮索されるような、心まで探ろうとする視線には……慣れないとどう、きつとこれからも。

——口ランは気付けない。普段であれば感付いたであろう二つの気配に。数多の目に紛れてしまつた、上空——バベルの最上階から降りかかる二組の目に。

それは、とある女神と彼女の側近……『元』最強の冒険者の物であるが……それを、口ランが知る由もない。

彼らが出会うのは、まだ先の事だろう。

衆目に晒されながらも、ギルドへと向かう足を止めることは出来ない。こうなつたら諦めるほかない、さつさと用事を終わらせてしまおう……。

——妙に人だかりが出来ている。

セントラルパークからでも確認する事が出来たその集団は、ギルドの目の前に集まつてゐる。口ランに嫌な予感が走る。

人の中心に存在する物、それは……掲示板だ。

確かに、記載されている事項の中に冒険者のレベル情報もあつた筈。僕の事もあそこから拡散してしまつたのか。ようやく合点がいつた。

「おい、あの青い装備。あいつが口ランじやねえか?」

僕にとつて、死刑宣告に等しい言葉が耳に響いた。その言葉を発したのは、多数いる人々——もしかすると、神々も混じっているのかもしないが……とにかく、誰が言つたかは分からぬが、妙に響いたその声は、集団の体を掲示板から此方へ一斉に振り向かせる。

ここから走り去る事を口ランは決断する。

決断の早さは即ち生に直結する。今まで多くの回数死に瀕してきた勇者だからこそスピード、その間僅か一秒未満。

目的地であつたギルドの正反対の方向に振り返り、そのまま疾走了。その速度は、モンスターから逃亡する際に鍛えられた健脚に支えられているのだ、並の冒険者には負けるはずがない。

「あっ！ 何処へ行くんだ!?」

「話だけでも聞いてくれないかなっ！」

「追いかけろ！」

「新しいファミリアに興味は無いかあーっ？」

様々な声を置き去りにして、冒険者たちは走り出す。オラリオは、今日も騒がしくなりそうだ。

「ただいまです、神様！」

「お帰りなさい、ベル君！ ……あれ？ 口ラン君はまだなのかい？」

ただ一人、拠点に帰還することの出来た少年の手には、換金所で得た貨幣の詰められた袋が握られている。

以前、口ランが持ち帰った量と比較してしまって、随分少なく感じてしまうが……その金額、何と五万ヴァリス。

L·V· 1 の冒険者がソロで稼いだ金額だということを鑑みれば、大したものだろう。

最も、その中身の大半は、キングスライムの魔石の分なのだが……。

しかし、それは今話すべきことではない。

まず、口ランの身に起きた異変を話さなければならない。

口ランさんが『スライム』と呼んでいたモンスターが合体して巨大な姿に変貌したこと。

新たに購入した剣で、そのモンスターを倒したこと。

そして、バベルの入り口で騒ぎを起こしかけて、自分だけ先に帰してくれた事……。

ベルの話を聞いたヘスティアの顔面が蒼白になっていく。

苦労して、バイトもしながら、ようやく眷属になってくれた剣士なのだ。

オラリオ最強という肩書きなんて無かつたとしても、他のファミリアに引き抜かれるなんて事態は御免だ。

「ロラン君に会いに行こう！無茶な引き抜きなんてあつたら大変だ！」

その言葉を聞いた時、ベルの脳裏に一つの言葉が思い浮かぶ。

——君と僕は、仲間なんだから

ダンジョンで、ロランが言つてくれた一言がベルを突き動かす。彼が僕らを見捨てて、他のファミリアに行くことなんて、まず無いだろう。

それでも、仲間が困っているかもしれないのだ。

助けに行かないなんて選択肢は、端から無いはずだった。

なのに、迷惑がかかるだけ、なんて理由で……。その時の自分を情けなく思う。

「行きましょう、神様！」

「やる気十分だね！さあ、僕らの家族を守らなきやつ！」

まるで扉を吹き飛ばすような勢いで扉を開く。

二人は、外に向かつて廃教会の中を走り抜けた。

……今、ロランが何処にいるか分からぬ、という問題に気が付いたのは、セントラル・パークまで無我夢中で走った後のことである。

ギルドの美人受付嬢だと、冒険者からは称されているエイナは落ち込んでいた。

先日、L.V. 10冒険者として、今朝からの大騒ぎを引き起こした男——ロランとの出会いを皮切りに、ダンジョンでの異常な出来事まで立て続けに起きている。

エイナのロランに対する判断は、中立をモットーとするギルドから

越権行為と判断され、山のようになつてしまつた。

これはいくら信じることが出来ないような数字だったとはいえ、自業自得なのだから仕方のないことだ。

今度、彼に会つた時には深く謝罪しなければならない。

しかし、それ以上に大変なのは、冒険者から続々と新種のモンスターに関する報告が届いている事だ。

青く、柔らかい肉体を持つゼリーようなモンスター。

人のような大きさのネズミ。

大きく、丸っこい蝙蝠。多数の触手を持つ、自身や他のモンスターの傷を癒すモンスター。

そして……先日、ロランに運ばれてきた鎧の冒険者から聞いた、一つ目の巨人。

上層だけでも、これだけの報告が来ている。

下層まで含むと、どれだけの数がいるか見当もつかない。

もう既にバベル支部だけでは処理が追いついていない。

ここ、バベル本部ですら仕事の多さにてんてこ舞いの状態だ。

鎧を着用していた彼——L v. 2の戦士は既に快復したので、自身の拠点に帰還しているだろう。

ただ、殆ど巨人に関する記憶は残つていなかつた。

覚えていたのは、おぼろげな姿形だけ。

(ロラン君には、後で詳しいことを聞かないといけないわね。)

そう考えた時、彼の姿が現れた。特徴的な青い装備は、妙に土埃で汚れていたが……ダンジョン探索でも行つていたのかと推測できる。

何故、彼が多数の人間からの猛追から逃れることが出来たのか、疑問に思う方もいるだろう。

その答えは……正反対の方向に逃げたと見せかけ、曲がり角を利用しながら、近くの物陰に隠れて人の波をやり過ごしたのである。

人の死角、この人数なら見逃すことなど無いという、当人ですら気付かないだろう小さな油断、様々な要因を巧みに利用した逃走術。モンスターから『にげる』際に鍛え上げられたのは、逃げ足の速さ

だけではない。

「ここにちは、ロラン君……昨日は、ごめんなさい」

「い、いや、大丈夫です。仕方ありませんよ……それより、前に行つた奥の部屋で話せませんか？ ここだと……その……」

深々と頭を下げて謝罪したエイナに対し、ロランはそこまで気にしてはいなかつたようだ。

もう諦観の域に入つてゐるらしい。自身はオラリオでも異常なのがだと。

……それよりも、ギルドに入った時からも、人の目が気になる。話題になつてしまつた僕のことが気になつてゐるのだろう。

「あ、そうね……ちょっと、ここだと人が多いわね。私も聞かなきやいけないことがあるの。」

二人は、またしても小部屋に移動することになつた。

以前は誰も気にしなかつたが、今回は皆に注目されながら。

ソファードとテーブル、そして椅子と本棚くらいしかない簡素な部屋。

それが彼らが会話をしている場所である。

「……十階層に出た、巨人のモンスターはロラン君が倒したの？」

「はい……それがどうかしたんですか？」

「一つ目の巨人のモンスターがダンジョンに現れた事は無いから、特徴を教えて欲しいの。」

「それなら構いませんよ。まず……ギガンテスは緑の肌で、太い手足を備えた、単眼の巨人です。頭頂部に角も生えていますが、これは攻撃に使う事はほとんどありません。あと、武器として巨大な棍棒を持っています。この一撃を食らつたら一たまりも無いでしょう」

「ふうん……ギガンテス？」

ロランの、まるで既に名前を知つてゐるかのような口ぶりに疑問を持つ。

新しく出現し始めたモンスターのはずなのに。

「あ、……いえ、僕の故郷に、奴に似た怪物がいてですね……」

ロランにとつては苦しい言い訳。が、彼女は信じてくれたようだ。

「……多分、そのギガンテスは迷宮の孤王に近い存在でしょうね」「モンスター・レックスですか？」

「ええ、特定の階層にのみ出現する強力なモンスターの事なんだけど……上層には今までにはいなかつたの。既に存在する巨人のモンスター『ゴライアス』も、モンスター・レックスの一種なのよ?」

……ゴライアス、という巨人がどれくらい強いのかは分からない。ただ、ギガンテスより遥かに弱い、ということは無い……と思う。「あ、それと、スライムつて、知っていますか?」

「スライム……あ、あの青い?」

「ええ……それが、合体したんです。合体して、より大きなスライムになつたんですよ」

「合体!……強化では無さそうね……報告、ありがとうございます。」

以前のモンスターは、別の個体の魔石を摂取することで、様々な能力の変動を起こしてきた。

しかし、決して合体と呼べるものではない。

——オラリオにおいて、ロランだけが知っている新たなモンスターの出現。

そのモンスターたちの『進化』。

この事件がもたらすのは、一体何なのか……誰も、神さえも知らない。

「そういうえば、ロラン君のファミリアって、ヘステイア・ファミリアだつたよね。あまり聞いたことの無い所なんだけど、どんなファミリアなの?」

「え?……そうですね……」

エイナも登録の際、一度だけ会つた事はある。

しかし、主神と話をしたことは無い。

ロランにとつて、ヘステイアたちはどんな人——神なのか。考える時間は与えられなかつた。

突然、座つていたロランの後ろに鎮座していた扉が開かれる!
エイナは驚き、ロランは冷静に、かつ迅速に振り返りつつ『はがねのつるぎ』の柄に手をかける。

扉が開いた先にいたその姿——ロランは見覚えがあつた。

思わず、ずつこける。

警戒して損した気分になつてしまつた。彼ら————へスティアとベルは、随分急いで来たらしい。

呼吸が乱れている。ロランの存在を実感するためであろうか。ヘスティアはロランの首に、ベルは腕にしがみつきながら話しかける。二人に飛びつかれても、ロランは全くよろめかなかつた。

大した安定感である。

「ロラン君、大丈夫だつたかい！変な神——特に口キとかつ！に無理矢理勧誘とかされて無いかい!?」

「ロランさん！無事で良かつた……何か、変な事とかされてませんか？」

……騒ぎになつてしまつた僕のことを、いざこざでも起きていいないか、心配して来てくれたらしい二人を見て、何だか苦笑してしまう。そして、とても——嬉しかつた。

「……こんなファミリアですよ、エイナさん」

未だしがみついている二人の重量を物ともせず、エイナに振り返る。二人は振り落とされそうになつてしまふが、その手を放すことは無かつた。

その姿こそが、何よりの証明だろう。

ヘスティア・ファミリアがロランにとつて、如何に良い家族であるか——その、証左として。

第八話

一通りの報告を終えたヘスティア・ファミリアの面々は、途方に暮れていた。

何故なら、ロランを目立たせず廃教会まで帰る方法が思い付かなかつたのである。

再び冒険者たちや神々に追いかけられることが無いとはいえない。というか、追いかけられる可能性の方が高い。

もし捕まつてしまつたら、その後に起ころは勧誘の嵐だろう。

そこに誘惑の魔法などの手段を選ばない者もいるに決まつていて。

「あの、もしよければ私に提案があるんだけど……」

そう言つてくれた、エイナの背後から光が差しているように見えたのは、きっと気のせいのはずだ。

エイナの案とは簡単なことであつた。

青い上着とヘルメットを脱ぎ、彼女から渡された布の袋に詰め、ゴーグルを掛ければ正体を隠せるのではないか、という妙案である。特徴的な青い装備については広まつてしまつていても、顔の細かい特徴まで知つている者は少ないだろう、という推測の元に立てられた作戦は……大成功であつた！

ロランの青い瞳はゴーグルに隠されており、彼の黒髪に至つては、外出するときにはいつもヘルメットに隠されていていたことから、その色を知つてゐる者はファミリアの仲間くらい。

若さゆえの幼さは残るが、十分に男前で誠実そうな顔立ちを廃教会の半壊した女神像に向けながら、エイナの慧眼に感謝するばかりである。

「さ、ダンジョンに潜つてお腹も空いたろう？　ちよつと早いけど、お夕飯を食べようぜ！」

ヘスティアの提案に否やは無い。

特にベルは今日初めてダンジョンに潜つたのだ。その疲労、空腹は推して知るべし。

三人で協力して作った夕食——シチューに焼き上げたパン、賄いのジャガ丸くん、更にはハンバーグまである豪華な食事を平らげ、三人並んで仲良く歯を磨いた後、ベルはベッドの上に横たわっていた。睡眠を取るのではない。

ダンジョンで得た経験値^{エクセリア}によるステータスの更新するためである。

華奢な背中を晒したベルに、ヘスティアが跨つている。

最初はロランと同じようにベッドの横に立っていたのだが、どうやらロランと違い、背中が小さくてやりにくかつたらしい。

まあ、お互い邪な気持ちは抱いていないのかもしれないが……スカートで男の身体に座つて良いのだろうか？

……神にしか、変えることの出来ないはずのステータス。

(――僕の現在のステータスが異常に高かつたのは何故だろうか。)元々持つていた能力が高かつただけなのか、それとも……ルビスから、オラリオの冒険者たちと同じように神の恩恵を受けていたのかもしねない。

当てもない旅の中、戦った怪物たちは数え切れない。

その時の経験が、僕のステータスに反映されていてもおかしくは無い……と、思う。

漏れていた光が収まる。

その時、ベルの努力が数値となつて明確に視認することが可能となるのだ。

しかし、背中を見たヘスティアの表情は……またしても、驚きであつた。

今回はロランのように有り得ないほどの高さによつてではない。上昇幅が異様だつたのだ。

その原因は――ベルの習得したスキル『憧憬^{リアイス・フレイズ}一途』以外には有り得ない。

その効果を、今はヘスティアのみが知っている。

能力値の異常な早熟。

異性への懸想によつてではない。英雄への憧れ、英雄になりたいという夢。

つまりは、ロランへの憧憬が続く限り、その効果は消えることが無い。その気持ちの強さが増すことがあれば、さらに早く能力が成長するだろう。

……こんな面白そうなスキル、暇をしているがために下界に降りてきた神々が見逃すはずも無い。

下手をすれば、ロランより興味を持たれてしまうかも知れない。

「……神様、どうかしたんですか？」

「わひやうつ！……い、今ステイタスを書いた紙を渡すから、ちょっと待つってね……」

——慌ててスキル欄の項目を消す。

(この事については、後でロラン君に相談しよう……。)

神が人を頼る、というのも何だか可笑しな話だが、この判断は正しい。数々の修羅場を切り抜けた勇者の判断が、神の英知に劣るとは限らないのだ。

ベルはヘスティアから渡された紙を見ても、ある異常には気付かなかつた。

慌てて消されたため、微かに黒いインクの残るスキル欄ではない。

他の冒険者であれば一目で分かる基本アビリティの異様さに。

熟練度上昇値が百オーバーという、スキル無しには絶対に不可能な数字に。

「こ、これが今の僕のステイタスか……結構、上がるものなんですね……」

この勘違いも仕方のない事だ。

ベルは初めてダンジョンに入り、初めてステイタスの上昇という現象を見たのだから。

部外秘とされる他人のステイタスを見れるはずも無い。

自分の凄まじさに気付かなかつたのは当然といえる。

「さあ、次はロラン君だね！」

「いえ、僕はいいです。多分ですけど、碌に上がっていないでしようから」

「もう、ロラン君がそう言うなら……」

昨日、空腹の存在があつたとはいえ、更新を忘れてしまつっていたへ
ステイアには納得がいっていない様子だ。

流石のロランと言えど、二日もダンジョンを探索すれば微々たるものであつてもステイタスは上がるだろうと考えていた。

……ロランは恐怖していたのだ。

もし、自分がこれ以上に強くなつてしまつたとしたら。

冒険者にとつて自分の命運を分けるのが力量である。

戦闘力の上昇を拒むようなロランの行為は、本来であれば愚行極まりないものだ。

しかし、彼の心に潜む闇が吹き飛ばされない限りは、ロランがステイタスの更新を望むことは無いだろう。

しかし、彼の行動は大した意味を持たない。

元々、モンスターを倒しただけで経験値を得て、世界の基準が違うとはいえ、レベルの上昇と共にステータスを上げることの出来た男なのだ。

ロランの背中には現れずとも、確かに基本アビリティは研鑽されていくことになるだろう。……まだまだ、微々たるものかも知れないが。

彼の闇を吹き飛ばす風を起こす者は誰なのであろうか？

女神か、少年か、それとも——旧知の友なのか。

一通りの用事を済ませた彼らは、昨夜よりは早い時間に各々の寝床に入つていた。

ヘステイアは拠点に一つしかないベッドに、ベルはソファーに、ロランはいつも通り壁に面した床に座っている。

ファミリア一番の稼ぎ頭であるロランを床になど寝かせられない二人は言つたのだが、逆にロランは柔らかい場所で寝るのは実は苦手なのだ。長い間野宿が当たり前、宿屋に泊るのは結構稀なんて旅をしていると、柔らかい寝床は彼にとつて落ち着かない場所になってしまった。

出奔したとはいえ、ローレシア國王子などというやんごとなき身分であるのに。

「明日からは、僕の訓練に付き合ってくれるんですよね？」

「うん、そのつもりだけど……」

ベルにとつて、ロランとは憧れの存在である。

今まで物語の中の人物しか知らなかつた英雄として。

英雄になる事、そして可愛い女の子と出会うためオラリオに来た少年が、彼に憧憬することは最早必然といえる。

その英雄が自分のことをマンツーマンで鍛えてくれる……少年が喜ばないはずが無かつた。

……彼もまだ、ロランがその実力をもつて、何を成し遂げて英雄になつたのかは知らないが……。

「ロランさん、よろしくお願ひします！」

知らぬが仮、という諺が存在する。

ベルにとつて、ロランの過去とはまさにこの一言が当てはまる。

彼がどのようにして、誰の目から見ても驚愕に値する力を身に着けたのか、少年は知らない方が簡単に幸せになれることだろう。

しかし、彼の闇を知らぬ間は、二人の王子と王女のような『眞の仲間』には決してなれないこともまた、事実。

朝早くから、ロランとベルの両名はオラリオを取り囲む市壁の上にいた。

まるで、雲に手が届きそうな高さ。

良く晴れた青空の下、彼らの石畳を叩く足音が明瞭に響く。

思いのほか広い、静謐な空気が漂う空間に彼ら以外の人物はいない。

何故、ダンジョンにも潜らず、二人がこんな場所にいるのかと言えば、約束をしていた特訓を行うために他ならない。

まず、手始めに、ロランが決めたトレーニングとは……持久走であつた。

都市の外周を回るように二人は走つている。

ロランは常にペースを乱さず、呼吸も一定だ。

しかし、ベルの方は自身の重さに四苦八苦しているようだ。それも

そのはず、彼らが行っているのはただの持久走ではない。

武器、防具共に装備し、まるで今からダンジョンを探索するかのような格好で走っているのだ。

ロランはその正体を隠蔽するため、ヘルメットと青い上着だけは脱いでいるが。

冒険者の防具には、基本的に堅牢な金属が使用されている。ベルの支給品である防具も胸の部分だけとはいえ、鉄のプレートが使用されている。

その重さは中々のものだ。

少なくとも長い間走るには不適当な格好だと断言できる。

ロラン曰く、冒険において最も重要なのは体力であり、装備を付けてまま最低でも一時間は休憩無しで走ることが出来なければならないうらしい。戦闘とは、走る事よりもずっと消耗する。

走ることぐらいは簡単にこなさなければならぬと。少年だつて彼の言いたいことは分かる。分かるのだが……

(……憧れの英雄に教わるのんだから、もつとこう、剣の技とか、戦闘に関する技術も教わりたいんだけどなあ……。)

——彼の願いが叶えられたのは、ベルが走り続けて息も絶え絶えになつた、目標の一時間後のことである。

持久走の後の休憩。

肩で息をしながら、土埃で汚れるのも構わず大の字になつたベルに、ロランが前々から気になつていたことを問い合わせる。

「そういえば、ベル君は何でオラリオに来たんだい？」

「……僕は……祖父から聞かされていたような……英雄に……なりたくて……」

喋ることもまだ辛い様子だ。

しかし、その姿がロランが認識されることは無かつた。英雄という言葉がロランの心に重くのしかかる。

ベルがもし英雄となれた時、自分と同様に迫害されてしまうのではないか、という不安がよぎつた。

オラリオの人とはあまり話したことは無いけれど、エイナさん、へ

ファイストスさん、……そして、ヘスティアさん。

彼女らが、どんな目で少年を見ることになるのだろうか。

ベル君が他者に受け入れられれば良い。

何も言うことは無い。

だけど、ロランの時は違った。

勇者としての力を拒絶されてしまった。

ローレシアの国民と、オラリオの人々は違つていて欲しい。最悪、同じ経験をした僕だけでも彼のことを守らなくてはいけない。

そのような決意を固めるには、早すぎる段階かもしないが……。

「男の浪漫とは……ハーレムを作る事だつて……祖父が良く言つていたんですよ……エヘヘ……」

幸か不幸か、ロランはその言葉を聞くことは無かつた。

思い悩む彼の顔と、ベルの疲弊しながらも、何を想像したのかは知らないが、顔を赤らめて笑うその顔は実に対照的なものであつた……。

「さて、今から実践的な訓練をやろうか」

「え、今からですか？」

ベルの身体には疲れが溜まっている。

正直、今から戦うのは、少年にとつては大分きついことだろう。

それを知つてか知らずか、ロランは何時の間に拾つていたのだろうか、木の棒を手に取る。

頑丈そうなそれは、六十センチ程はありそうだ。

「疲れているからこそ、だよ。ダンジョンのモンスターたちは君の体調なんか関係なく襲つてくるからね」

「そ、そういうものなんですか……？」

「魔物とは、そういうものさ。……僕を、倒す気でかかつて来るんだ」

その一言は、心優しい少年にとつては衝撃的なものであつた。

一時的な、仮初めの感情といつてもベルは味方に敵意を抱けるような性格をしていない。

少年が葛藤するのとは裏腹に、勇者は棒を一振りする。

『ひのきのぼう』ですら立派な武器と化す腕前。

そこいらで拾つた大枝であつても、目の前に立つベルを打ち倒すく
らい訳無い。

その証拠として、ロランが何気なく振るつた棒の風圧だけで、石壁
の表面が砕けてしまつた。

……二回目の命の危機が、こんなにも早く訪れるとは思わなかつ
た。

今になつて、レベルというものの本質を理解する。

本来、レベルの差とは絶対的なものである。

L v. 1 の自分が、L v. 10 の剣士に全力で挑まないことなん
て、驕り以外の何物でもない。

ベルは刃があるナイフで、ロランはただの棒。

それでも尚、両者の間には圧倒的な戦力差が存在する。

震える足をベルは手のひらで叩き、自分を鼓舞する。

(ロランさんに並び立つためには、これくらい乗り越えなくちゃいけ
ないんだ――)

短刀を正眼に構え、相手に向かつて走り出す。

目の前に立つは、破壊神を乗り越えた英雄。

将来、英雄を目指す者の相手にとつて、これ以上の者はいないだろ
う。

——ロランは、ベルの成長速度に驚愕していた。

おつかなびつくりゴブリンと戦つていた時とは違う。

一回りはスピードが上がつてゐる。

これも、『神の恩恵』のおかげだろうか。

ベルに対する評価を上げながらも……やることは変わらない。

コンパクトに振り上げた短刀、恐らく、隙を無くしてリーチの短さ
を生かした攻撃の回数で攪乱する作戦を立てたのだろう。

戦闘に関して未熟であつた少年にしては良い戦術だ。しかし――

短刀を持った側の手首を左手で押さえる。

勝手に棒で戦うと思い込んでいたベルは、驚きで一瞬硬直してし
まつた。

その頸に右手を当て、ベルの身体を受け流すように左腕を引き、掴んだ顔を若干手加減をしながら地面に押しつけるように動かす。

瞬間、ベルの身体が宙に浮いた。

——その投げ技は東国の武術、合氣道のそれと酷似していた。

ベルの後頭部が地面に叩きつけられる……直前に、ロランが右手でベルの首を抱える。

間一髪、ベルの意識が飛ばずに済んだ。そのまま彼の身体を起こす。

「相手が武器を持つていても、使うとは限らないんだ。さあ、もう一度だ。……来いっ！」

「……は、はいっ！」

……思考までも止まっていたように見える。

ロランに声を掛けられて、ようやく自分が教えを受けていたのだということに気付く。

ベルにとつては紛れもない、『実戦』の中で。

——ベルの訓練は、持参したサンドイッチの簡単な昼食を挟んで夕暮れまで続けられた。

一撃を受けること覚悟で突きに走った際は、足を掛けて転ばされる。

鞘を牽制に使つた短刀との二刀流もどきで正面から向かつた時は、瞬く間に彼の装備する棒によつて二つとも弾き落とされ、喉元に棒の先端を突きつけられる。

奇襲を狙つて監視用の塔に駆け上り、上から飛びかかっても、短刀を持つ腕を掴まれ、背負い投げの要領で地面に叩きつけられる。

全く歯が立たなかつた。

ロランは無傷のまま、かすり傷ばかり増えていく。この擦り傷こそ、ロランが極限まで手加減していることの証。

本気を出していたなら、碎かれた石壁と同じ道を歩んでいたことだろう。

しかし、それでもベルは自分が強くなつたという実感があつた。

適宜行われるロランからのアドバイス。

頭の中で試行錯誤しながら強敵と戦う術を編み出そうとする。この経験は、得難いものなのだろう。

ロランと同じファミリアである——その『幸運』に感謝した。

「……ベル君は、敏捷さを生かして戦うのが得意みたいだね」「た、多分……そう……なんですかね？」

肩で息をするベルに対して、そう判断する。

短刀という武器は、もともと彼の性質的に合っていたらしい。下手に長剣などを買わなくて良かつたと思う。

——それなら、あの技が良い。

自分も剣の師にやられた事のある戦法。

厳しい鍛錬の後に、これから自身が教わる奥義を魅せられる。

要は飴と鞭の事だ……単純だが、効果の高い教え方である。

モチベーションを下げる事なく、鍛錬を続けさせるにはもつてこいの方法。

その時、確かにこう言っていたはずだ……。

「ベル君、今から僕の、す、スーパーな必殺技を見せるから、一日でも早くマスターしてね……？」

「え!? 良いんですか? ロランさんの技なのに……?」

「ま、まあ、正確には僕の流派の奥義だけどね……多分、短刀でも扱えると思うから」

思わず恥ずかしさに顔を赤くしながら、ロランが今日初めて鋼の剣を鞘から抜き放つ。

その標的は……上空。

流石に、オラリオを守る石壁を切断するわけにもいかないだろう。

ベルと、特訓による剣戟の音に気付き、偶々壁上にやつて来ていた金の瞳を持つ少女だけが、その奥義を見ることが出来た——それは、神速の二閃による刃の煌めき。

ロランの放つた『はやぶさ』の如く襲い掛かかる振り下ろしの斬撃は、空氣という実体を持たない存在すらをも切り裂く。

ほんの一瞬、真空となつた二本の線状の空間に、大気が流れ込むよ

うに風が巻き起ころ。

遠く離れていた少女の流れるような金の髪が、その風に揺れる。
この技を、サマルトリアの王子は、得物である『はやぶさの剣』の
特性を生かし、まるで風のように絡む斬撃へと昇華させた。

『古流剣殺法二文字』

威力を重視した他の奥義とは違い、速度を重んじた奥義。
この技こそ、ベル・クラネルという冒険者が習得するに相応しいだ
ろう。

第九話

拠点に向かつて歩を進めながら、金眼の少女は黒髪の青年の剣技に考えを巡らせていた。

今まで見た事も聞いた事も無い容姿を持つ、冒険者と思しき男が市壁の上で見せたそれは、まさに絶技。

あれほどの剣を自身が振るうことが出来るだろうか。

この疑問の解決に没頭する余り、周囲の市民や冒険者に注視されていることには気付いていない。

風の魔法さえ使えば似たような現象を再現することは可能だろう。風を刀身に纏わせ、大気を巻き込むような剣閃ならば出来る。しかし、技量の差を客観的に、そして正確に把握しているからこそ結論を下す。

——自分の剣では『空氣』を斬ることなど出来はしない。
彼の剣はただの素振りなどではなく、まさしく空氣を標的にしたものの。二条の軌跡の上には、何も在りはしない。

そこに残るは無——即ち、不自然に造られた真空の空間である。真空は目には見えず、大気が巻き戻る現象だけが存在していた。その時、横には白髪の少年がいた。

少女よりは近く、しかし青年から十分に距離を取つた彼に対しても鞭を執つていたのかもしれない。

力を追い求める者たち全てが喉から手が出るほど望むと思われる、青年の生徒という立場。

それは、金眼の少女にとつても例外では無かつた。
いや、寧ろ冒険者の中でも一二を争うほどに求めているのかもしれない。

力、というもの渴望し、執拗に追い求めてきたから……遂に、成長が打ち止めを迎えていたからこそ、少年を羨ましいと人一倍に感じている。

もし、黒髪の、ゴーグルを掛けたあの青年に会うことがあるのなら……恥を忍んで、師事を頼み込んでみよう。

彼の人柄は知らないけれど、例え無下に断られたとしても、何も行動しないよりはマシだ。

そう決断する頃には、彼女が所属するファミリアの拠点の前に到着していた。

どうやら、あまり意識は向けていなくとも、その足は道のりを覚えていたらしい。

中央広場から北に伸びるメインストリート。

そこから一つ外れた街路の脇、オラリオの最北端に位置する建物の名は『黄昏の館』。数多の探索系ファミリアを抱えるオラリオの中でも屈指の実力を持つ『ロキ・ファミリア』の本拠である。

明日に迷宮への遠征を控えた彼らは、本日は休息することを命じられていた。特に、当該の少女に対しては念入りに。

戦姫、剣姫……その称号に遜色の無い実力を持ち、ロキ・ファミリアの中核を担う、たつた今、館の扉を開けた金髪金眼の少女剣士の名は——アイズ・ヴァレンシュタインという。

ヘスティア・ファミリアの面々は一つの転機を迎えていた。

各自の生活パターンが形成され始めたのである。

ヘスティアはバイトに勤しみ、ベルは実力に見合った上層まで下り、モンスター狩魔石を集めれる。

ロランも同じく上層にまでしか潜っていない。そして時折ロランがベルに戦闘とは何たるかを指導するのである。

三人が暮らしていくには十分すぎる金額を得ることが出来ており、貯金が増える一方の現状からすると、ヘスティアが一時貧乏暮らしがしていたことがまるで嘘のようだ。

この様子なら、女神がバイトをする状況から脱する日も近いかもしれない。

ここで疑問となるのが、オラリオでも最強の実力者であるロランが上層にしか行つていないことである。

彼の実力に見合う階層がダンジョンに存在するのかはまだ分からぬが、少なくとも上層のモンスター如きでは相手にもならないはず

だ。

特訓の最中、その旨の質問をベルもしたことがある。

「僕も、今よりは下には行けると感じるけど……アイテムだけでもリュックが一杯になってしまふからね。食料とかを持つ余裕がないのさ。だから、日帰りの探索が精一杯だと思うよ」

例えどんなに人並み外れた実力を持つとしても、ただの人間ヒューマンが飲まず食わずで体力を非常に消耗するダンジョンにおいての戦闘をこなせる訳がない。とは、ロランの弁である。

……ベルは、ロランなら案外三日三晩くらい何も口にしなくても、難なくモンスターを薙ぎ倒してしまいそうな気がしたが、勝手な憶測を実際に口に出すのは流石に失礼というものだろう、親しき仲にも礼儀ありの心を、ベルはちゃんと心得ていた。

事実、可能ではあるが。

ベルもロランとの特訓や、ダンジョンでのモンスターとの死闘によつてめきめきと技量を上げている。

しかし、『古流剣殺法二文字』を習得するには至っていない。

ロランの動作と似たような動きをすることなら出来るが、奥義の本質を捉えることが出来ていない。

これでは、習得にはまだまだ遠い。

最低でも、この技を修めるまでは特訓は続くことになるだろう。

閑話休題。初めての修行のおよそ十日後、ロランはようやく慣れ始めた迷宮の入り口にかなりの早朝からその姿を現した。

昨日ベルをこれでもか、という程に扱くと同時に彼自身も決して軽くない、寧ろベルより遙かに過酷な修練を行つっていたのにピンピンしているように見える。

勇者の称号は伊達ではない、ということか。

しかし、修行が終わつた頃には喉に食事が通らない状態であつたベルも、既にダンジョンに入つていることだろう。

彼もまたオラリオでの生活に慣れてきた、といつたところか。

ロランは何時もの特徴的な青い装備を身に纏い、ゴーグルをかけて、ロトの剣とはがねの剣を背中に差した格好だ。

この格好をする時は迷宮を探索する日と決まっている。

プライベート（？）の服装と、探索する時の装備を使い分けることによつて、装備しているときは好奇の視線を向けられようとも、せめて素顔、髪型の特徴だけでも広まるのを防ごうとしているのだ。

『元』英雄にしてはかなり情けない発想も、今まででは少しは効果があつた。

しかし、人相までもが完全に広まつてしまふのも時間の問題だろう。

——思わず口ランは憂鬱な気分に陥つてしまふ。

しかし、そんな事を気にかけてくれるような怪物共は存在しない。四足歩行の黒い獣。まるで大型の犬のようなモンスター……ヘルハウンドの群れ。

五頭の口からは軽く火が漏れている。

彼らの特徴として第一に挙げられるのが、強力な火のブレスである。

ほぼ全ての生物にとつて『高温』というものは脅威であり、一度喰らつてしまえば重傷は免れない。

ヘルハウンドの決死の同時攻撃が、口ランに襲い掛かる——！

瞬間、口ランの身体を爆炎が包み込んだ。包围した後に効果範囲の広い火炎放射、避ける隙など皆無である。一体の火炎ですら致命的な攻撃となる。

それを複数回、口ランは喰らつてしまつた。

勝利を確信したのか、感情など無いはずのモンスター共が心なしかニヤリとその口元を歪めたように見えた。

『放火魔（バスカヴィル）』の異名に相応しい苛烈な炎、一介の冒険者など消し炭すら残るか怪しいものだ——

しかし、ヘルハウンドご自慢の火炎は、口ランにとつては足止めにするなりはしない。

まるで壁のように立ちふさがる炎を軽々とその両腕だけで振り払う。

その顔に微かな煤は残るが、目立つた火傷も残すことは敵わなかつ

た。 いつもの装備も無事であるのは、その見た目に反して防具として、耐火性能が高いことを示している。

その鋭い眼光の射抜く先にあるのは……当然、哀れな犬であつた。はがねの剣を抜く動作、込められた殺氣の行き先の獸に明日は無い。

——十一階層に、悲しき犬の断末魔が響く……。

戦闘と呼ぶには余りにもあつけない戦闘を終え、ロランは一時の休息を取っていた。オラリオの迷宮とは彼にとつて摩訶不思議な存在である。

太陽の光届かぬ地下空間であるのに植物が生えていること、発生源が不明な霧、倒すと塵に変わるモンスター……例を挙げるとキリがない。

しかし、幾度か探索を繰り返した今、構造については多少理解できた。下層に行くにつれて階層の面積は増え、かかる時間も比例して増える。日帰りで探索を行うとすれば……恐らく、十五階層目くらいが限度だろう。

幸い、ロトの剣に関してはメンテナンスなどほぼ不要。

維持費がかかるのは、はがねの剣だけという恵まれた状況である。

财沢な生活など元から望んでいない、金銭は必要以上に稼げている。

当分は必要以上のリスクを背負わずに、ここいらの階層をメインに稼ぐ方が良いとロランは判断していた。

……しかし、ロランには、このダンジョンを作り出した者の目的が想像もつかなかつた。

人知をはるかに超えた能力で、何を為すためにわざわざ広大な迷宮を、そしてモンスターを産み落としたのか。

以前の『敵』、邪神官であれば、世界の支配という明確な悪意があつた。

しかし、オラリオに潜むものは何であるのか見当すらつかない。

そもそも悪意を持つて造られたものなのか、それさえも分からな
い。

——口トの血族としての考え方が染み付いてしまつてゐるのか、
『悪』を斃すことばかり、考へてしまふ。

そもそも、深層に潜るつもりのない彼には関係のない話であるはず
なのに。

考へ事をしてゐた時、ロランの耳に地面がまるで振動するような音
が響く。

大型のモンスター、恐らく二足歩行の大型、数は十数体。通路の奥
からの音のみでそこまでは判断できた。

耳という器官の一つだけでも、モンスターに関してならこの程度の
判断ならば歴戦の勇者にとつては容易なことである。

しかし……ロランは今いる階層で、このような足音は聞いたことが
無かつた。

通路の奥から姿を現すは——ミノタウロスの、群れだ。

雄々しい牛の頭部に、筋骨隆々の人の肉体を備えたモンスター。

武器も持たず、特殊な能力も有さないが、その人外の臂力だけで冒
険者にとつて十分な脅威となりうる。

そのはず、なのだが……。

まるで、彼らより強大な何かから逃れるように狂乱しながら駆ける
その様は哀れみすら誘うものであつた。

無論、これはロランだから抱いた感想であつて、ただのLV. 1冒
険者などでは恐怖しか感じることは無かつただろう。

ロランは立ち上がり、服の臀部に付着した土埃を払う。右手に剣を
構え、盾を左手に装備する剣士にとつてオーソドックスなスタイルを
取る。意識を思考から戦闘へと向ける速さこそ、異常な事態に慣れ
切つて いることの証。

この数だ、軽い乱戦になることが容易に予想できる。

彼は肉体の耐久力に任せて盾をここ最近は使用していなかつたが、
今回は違う。

多数対一の場合には、盾という存在は重要な意味を持つ。

複数の方向から迫る打撃を捌くには剣一本ではとても足りない。

ミノタウロスにとつてはまさに前門の虎に後門の狼。

しかし、一度恐怖を植え付けられた者に再度挑むほど愚かではない。

目の前にいる青い人間さえ屠れば、生き延びることが出来る可能性が生まれるのだ——

しかし、その望みが叶えられることは永劫に無い。

群れを追いかけていた男女二人組の冒険者など比較にならない程の戦力が秘められていることに気付けるほどに彼らの勘は鋭くは無かつたらしい。

ミノタウロスが拳を振り上げる。

次の瞬間に放たれる強烈な打撃は岩石をも碎く。
しかしその拳を振り下ろす時は、来ない。腕を上に挙げた体勢のまま、上半身と下半身がズレる。

ミノタウロスの動体視力では到底捉えられない速度の袈裟斬り。
身体を両断されたというのに、怪物たちは剣を抜いた動作にさえ気が付かなかつた。

赤い液体を噴き出しながら塵へと変わる仲間を見て怪物たちがたじろぐ。

血に濡れた刃を血振りし、再度構えるその青き姿は、牛の瞳にはまるで化物のように映つたことだろう。

二人の男女が迷宮の内部を疾走する。

女性の方は金髪を揺らすアイズ・ヴァレンシュタイン。

男性は乱雑に切られた銀髪の中に獸耳を携えた、いかにも荒々しい
ウエアカルフ
狼人、ベート・ローガ。

ロキ・ファミリアの身内の張り切り過ぎにより討ち逃がしてしまったミノタウロスの大群。下手をすれば名も知らぬ冒険者が犠牲となってしまう。

それをみすみす見逃すほど彼らのファミリアは組織として腐つてはいない。

追跡しながらミノタウロスの数を着実に減らしてはいたが、その隙に十数体見逃してしまった。

通路を走った際、嫌でも嗅ぎ慣れた匂いが鼻に着く。

——血の、まるで鉄が錆びたような匂いだ。

遅かつたか、二人の胸中を悲観的な思いが支配する。

広がつた空間に、飛び込むように入する。

しかし、霧に包まれたルームには彼らが想像したような光景は広がつていなかつた。

一人の剣士が、左手に構えた華美な盾をミノタウロスが二頭いる内、片方の頭部に叩きつけた。

……頭蓋が碎ける音が聞こえる。

逞しかつた肉体が力を失くしたかのように崩れ落ちた。

床にはまるで池のように溜まつた、モンスターの物と思しき血。赤く汚れた魔石と角が、ミノタウロスが一頭を残して他に倒された事実を示す。

剣士の、元が何色であつたか分からぬ装備。

血に染まつた剣。残つた一方の怪物に向けられた殺氣。

同じ意思を持つ人間であると理解していたとしても、誰もが怖気づいてしまうような異様な雰囲気を放つていた。

ミノタウロスも剣士の放つ迫力に、それに見合つて仲間をいとも容易く瞬く間に屠つた戦闘力を前にして、ようやく逃走する。

残つたのはただ一頭。他は残らず殺戮された。

異形の向かう方向には二人の人間が見える。一度は敗走した相手の片割れだが、あんな化け物のような存在と闘うよりは生き残る目があると判断したのだろう。

臨戦態勢を整えた男女の冒険者に、その両腕を叩きつけんと振りかかる——！

人に襲い掛からんとする怪物が、剣を持ったロランに背を向ける。

勇者といえど、彼はそんな愚行を見逃すようなお優しい性格はしていなかつた。

まるで素振りをするかの如く、剣が何も無い空間を切り裂く。

ただし、今回の標的はオラリオの空ではなく……モンスター。

——見えぬ強大な圧力がミノタウロスの上半身を叩き潰したかのように、怪物の上半身が破壊された。

それはまるで小規模な爆発が突如発生したようでもあり、ミノタウロスであつた肉片がバラバラと周囲に撒き散らされる。

口ランは、モンスターすら殺せるほどの威力を持つ衝撃を、剣の一振りによつて飛ばしてみせたのだ。

……例え彼の流派である古流剣殺法を修めたとしても、今の現象を再現することは不可能だろう。

当然の摂理である、何故ならばそれは到底奥義などと呼べるものではなく、口ランの人外じみた怪力を駆使して成せる業なのだから。

その際、虚を突かれた二人の冒険者に、血の雨が降りしきつたのは不幸としか言いようがない。

アイズは驚愕に尻餅を付き、ベートは血を浴びて尚、臨戦態勢のまま硬直した。

血液自体は見慣れているが、目の前で不可解にモンスターが碎ける経験などしたことが無かつたからだ。

三人の遭遇は良くも悪くも衝撃的なものであつた。

この『出会い』が何をもたらすのか——それは彼らにも、例え神であつても知る者はいないのだろう。

第十話

ベートは、眼の前の男を何故か見つめていた金髪の女剣士——アイズを、足元にある魔石を拾い続ける剣士からその身で隠すかのように立ち位置を変えた。

それは、ロキ・ファミリアの冒険者であり、狼人のベート・ローガが目の前の剣士——ロランについて、そのたちを計り兼ねていたからである。

彼も当然ロランの事については知っていた。

ベートの主神であるロキが、何杯ものやけ酒を煽りながら「何でのアホんところにいいいいいいいいいい!!!!」と大騒ぎしていた、というのも少なからず要因に含まれるのだが。

まあ、史上初のレベル二桁到達者であり、突如現れた最強の剣士の事を知らないオラリオ住人の方がおかしいともいえる。

また、現在のロランの見た目はまさしく狂戦士であるとしか言いようがなかつた、というのもベートがロランを計りあぐねた要因といえよう。

青かつたはずの装備はミノタウロスの血で真っ赤に染まり、ところどころ時間の経過によりどす黒く固まっている。

また、剣も血振りをする間が無かつたため、これも鮮血に濡れていった。今回ベートが、ロランを狂戦士であると疑つてしまつたのも、それは不可抗力である。

……ロランが、ミノタウロスに剣を振るつたとき。

ただ、ロランの戦意をベート自身では無く、彼の居た方角に向けられただけで、ベートの身体は硬直した。

いや、してしまつた。それは、弱者には価値がないとすら断じる彼にとつて、これ以上に無い屈辱であつたことは想像に難くない。

そのため、無意識にベートは必要以上の敵意と警戒心をもつてロランと対峙することとなつた。

もつとも、ロランとは完全に人畜無害といつて良い存在であり、その行動は哀れな徒労にしかならないのも確かだつた。

ロランがその過剰な警戒心に気付かないはずも無い。

そして、彼自身がいかに目の前の人物にとつて怪しい存在であるかも理解していた。

しかし、ロランにはその場を離れるわけにはいかないのも事実であつた。

その理由とは、単純である。

ベートとアイズの足元に、彼が倒したミノタウロスの魔石が転がっているのだ。

たつた一つといえなくも無いし、そこまで生活が困窮しているわけでもないが、お金とは、大事なものである。

以前、旅をしていた際に装備品を揃えるにも非常に、非常に金銭面で大変だつた経験が、彼の身には染み付いていた。

やがて、ベートはロランの彷徨つていた視線に気が付く。
気付いてしまつたら、僅かに警戒が綻びてしまつた。

最強の剣士のくせに、ミノタウロスの魔石一個分の金が大事なのか、と。

しかし、その弛緩は一瞬である。

思わず氣が緩んでしまつた彼自身に腹が立ち、軽く口の中で舌打ちをし、足元にあつた魔石を軽く蹴つ飛ばした。

流石に足技を主とした格闘戦に一家言ある、とでも言えばよいのだろうか。

見事なコントロールで、魔石がロランの足元で止まつた。

「……おら、さつさと拾え」

「ありがとう。それと……すまない、血を撒き散らしてしまつて」

あまり長々と二人の前にいてしまうと、自分が彼らの脅威として存在してしまい、警戒せざるを得ない。

それを知つていたロランは謝罪だけ済ませて足早にルームから立ち去つた。

ロランの背中が遠ざかつていき、ルームからその姿を消す。

それまでずっと後姿を睨み続けていたベートは、大きな肩の荷が下りたかのように大きな溜息を一つ吐いた。

そして、自分がかばい続けていた、先ほどから何の反応も無い仲間に振り返る。

「おい、アイ……っ!？」

ベートは、驚愕した。かの女剣士の表情に。

——それは、まさしく怒りの表情であった。頬を空氣で膨らませ、彼女が怒っていることを、これ以上に無く表す顔であった。

千載一遇のチャンスを奪つたベートに対する憤怒は、それはそれは深いことだろう……

名実ともに新米冒険者であるベル・クラネルは上機嫌であつた。ヤモリのようなモンスター、ダンジョン・リザードを七体もまとめて退け、自身がより強くなつていることを実戦で感じることが出来たのは、英雄を目指す彼にとつて大きな喜びである。

また、ダンジョンに潜る前に、寝坊して朝食を食べそびれてしまつたが、そのおかげで『豊穣の女神亭』従業員、シル・フローヴァから美味しい弁当を貰い、気力にも満ち溢れていた。

勿論、彼女が薄鈍色の髪をボニー・テールのようにまとめた美人な街娘であつたことも、気力が満ちた要因の一つなのだろう。

もつとも、弁当の代わりに夕飯をちょっと……いや、かなりお高いその店で食べることを約束してしまつたが。

周りを見渡して、隠れた敵がないことを確認してからダンジョン・リザードからドロップした魔石をバッグに詰め込む。魔石を拾う前には、必ず周りに注意を払うこと。

これはロランとの修行の中で何度も言われていたことだった。

魔石を拾い終えた後、ベルの耳に足音が響く。

オラリオに来てからといふものの、五感の重要性はダンジョンの中で嫌というほど学ばされた。

目を凝らし、通路からルームに入ろうとする影を注視し続ける。

支給品のナイフを握りしめた手が、戦闘に入る前の緊張感によつて汗ばむ。

しかし、影の正体を把握すると同時に、その緊張がスッと引いてい

くのを感じた。

——その人影は、赤かった。何時ものように、血に染まつて。

「今日は、随分……その……赤いですね、ロランさん」

「ははは……モンスターの群れと、遭遇しちやつてね。服に気を使う暇が無かつたんだよ……」

呆れ混じりのベルの声に、ロランは力なく返事することしかできなかつた。

最近、ロランは自分の装備に血液がつかないようにかなり気を使っている。

なにせ、ロランの装備は強靭ではあるが、ベースは布である。革鎧やプレートメイルとは違い、液体が付着しても拭うだけで何とかなるものではない。

ダンジョンから戻るたびに、ギルドのシャワールームで一々洗濯するのはかなりの面倒だ。

多少なりとも性能が落ちても新しい防具を買うのも良いかもしないと考え始めてしまうぐらいには。

「夕暮れ時だし、僕はそろそろ戻るけど……ベル君は、どうする？」
「もう、そんな時間なんですね。じゃあ僕も戻ります……あつ、そうだ」

ベルの頭には名案が浮かんでいた。

約束を果たし、ロランへの恩のほんの一部だが返すことの出来る妙案である。

「ロランさん、良ければ今夜は外に食べに行きませんか？」

ヘスティアフアミリアの三人は食事は毎食自炊することが常であつた。いくらオラリオの最強戦力を抱えているとはいえ、ファミリア自身の規模や稼ぐ金額は零細も零細、下手をすれば探索系ファミリアの中でも最小レベルである。

あまり贅沢を出来る立場では無いのだ。

「いつもお世話になつてますから、今日は奢りますよ！」

「……ちゃんと、ヘスティアさんも誘うんだよ？」

ベルのとぼけた顔を見るに、彼は主神のことにもう気が回つてい

なかつたらしい。

オラリオの西地区には、ファミリアに属さない一般の労働者たちが住居を構え、大きな住宅街が形成されている。

中でも、西メインストリートの一際大きな造りの酒場こそ、『豊穣の女主人』である。

元腕利き冒険者である女主人ミア・グランドが切り盛りするその酒場は、駆け出しには目が一気に覚めるような値段の、しかしながら美味しい料理を出す店として有名だった。

……そして、L.V. 2程度の冒険者であれば、無手で店から叩き出してしまえるほどの腕利きウェイトレスたちがいることが、一部で有名になつていてる。

西の空に日がまだ沈み切つていない、明るい時分であるからだろうか、客の数はいまだ少なく、三、四人の冒険者のパーティーが木製のテーブルに数グループ、そして真っ直ぐに伸び、途中で直角に曲がったカウンターに一人、行商人らしき人がエールを片手に料理を楽しんでいるだけであつた。

しかし、もう三十分もすれば、冒険者たちで席が埋まつてしまふことだろう。

彼らに接客をしていた給仕の従業員と、恰幅の良いドワーフの女主人がふと、一部を除き一斉に開かれた入り口に視線を向けていた。彼らの内で示し合わせていたわけでもなく、客が入ってきたわけでもない。

実力のある従業員のみが、入り口に何か力強い気配のような、凄まじい何かを感じ取つたのだ。

ダンジョン内や、様々な修羅場で鍛え上げられた『危機察知能力』を、たかが感覚と侮ることなけれ。

実際に何度も危機を回避したことも数知れない、冒険者における一種の必須技能ともいつていいものなのだ。

開けられた扉から入つて来たのは、白髪赤目の少年であつた。

装備も、あまり質の良い物という訳でもなく、立ち振る舞いからも、

明らかな新米冒険者であった。

(――あたしの勘も、衰えたのかねえ……)

女主人が頭の片隅で自身の衰えを自虐しかけた時、少年が声をあげた。

「神様！　ロランさん！　このお店です！」

その言葉……いや、名前が響いた瞬間、店にいた人物全てが大小様々な反応を見せた。

女主人は軽く目を見開き、冒険者たちはその姿を一目見ようと酒を飲みかわしていたジヨツキをテーブルに置き、一度入り口から視線を外した従業員たちも再度その入り口を見つめた。

「いやあ、ベル君に食事に誘われるなんて。　僕は果報者だね！」

「そうですね、ヘスティアさん。　そのうえ、今日は彼の奢りですか

ら」

などと談笑しながら入つて来たのは、若干幼い顔立ちに、ツインテールを携えた美少女と、白い麻のシャツにカーキ色の簡素な長ズボン、そしてその普通で地味な格好には到底似合わない、異様に霸気を放つ見事な聖剣を身に着けた青年であった。

誰の目にも青年がかの『最強の冒険者』である事は明らかだつた。

ただし、その恰好だけに目を取られて、少年が虚偽の事実を言い放つただけだと判断する未熟な冒険者もいたようである。

彼らはロランを見て失笑を抑えることが出来ないようだったが、その様子をウェイトレスたちに白い目で見られたことにも気付かなかつたらしい。

「あっ、ベルさん。　来てくれたんですね！」

ここで、件の少女が、ベルに気付く。

勿論、彼女には危機察知能力など無く、入り口に視線を向けていたばかりの従業員の内の一人である。

「今日は、ファミリアの皆さんと一緒にですか？」

どうやら少年は女性ばかりの店に入ることに逡巡していたようだが、後ろに二人詰まっていたこともあり、決心を固めた様だ。一步、足を店に踏み入れる。

「……ええ、やつてきました」

「それでは、こちらのテーブル席にどうぞ」

ヘスティア・ファミリア一同がシルに連れられて、ぞろぞろとテーブル席に移動する。

その間もロランは奇異の目を冒険者たちから向けられ続けた。カウンターの行商人からもすれ違う際、ロトの剣を背負った背中をジツと見つめられる。

しかし、悲しいかな、オラリオに来てから様々な視線に当てられ続け慣れ切ってしまったロランは気によることも無く、彼らが案内された隣のテーブルに視線を向け……嫌な予感がした。

隣のテーブルを含めた複数の客席には同じ札が立てられ、明らかに団体客が予約をしていることを暗示させていた。

この迷宮都市において、団体とは即ちファミリアと言つていい程、多数のファミリアが存在する。

つまりは、予約している団体もファミリアの可能性が非常に高いということだ。視線の多さには慣れだが、しつこく勧誘を続ける神たちは関わり合いになることをロランは避けていたかった。

しかし、今更何かを言つても変わる訳ではない。

今は、仲間と食事を楽しむ時だと、半ば自棄になつてメニューを開き、見つめる。

そこには、何時もの食事の数倍はあろうかという値段の料理が書きつづられていた。

思わず値段に、ハツとベルを見つめる。

しかし、彼に取つてもこの値段は予想外だったようで、顔が青ざめているのを隠せていない。

まあ、ロランの懐事情からすれば問題ない金額である。

最悪、ロランがこの場の会計は立て替えるか、そのまま払つてしまえば構わないだろう。

しかし、ロランの予想に反してベルの決意は固かつたようである。ベルは隣に座る女神と、向かいに座るロランに顔を向けると

「た、多分今持つてあるお金で払えるとは思うので……好きなんだけ！」

頼んでください！」

——と、言い放つた。

ベルが今回の探索で稼いだ金額は、およそ5600ヴァリス。パスタ一皿300ヴァリスの豊穰の女主人の会計を済ませたら、半分は消し飛んってしまうことだろう。

それでも、少しでも、ベルには口ランに恩返しをしたいという強い気持ちがあつた。

ヘスティアも、料理の値段を見て少し逡巡したようだが……眷属の覚悟に、応えようと決めたらしい。

注文の内容を三人で打ち合わせた後、ビシイツ！ と効果音が出そうなほどにその右腕を直立させ、ウエイトレスを呼び止める。

「ご注文はお決まりでしようか？」

愛想よく話しかけるシルに、ヘスティアは壯絶な覚悟をその表情に湛えさせたベルを尻目に、長めの注文をこなしてみせた。

「前菜の盛り合わせを三つに、ハンバーグを一皿、ステーキ二つに、最後にパスタ三種類をそれぞれ一皿！ お願ひするよつ！」

それは、ヘスティア・ファミリアの食費一週間分にも届くような注文であつたという――

第十一話

『豊穣の女主人』にもまばらに客が集まり始めた頃、ヘスティア・ファミリアのメンバーは食事の真っ最中であった。

主神であるヘスティアは肉汁溢れるジューシーなハンバーグを実際にうまそうに頬張り、ベルも腹が決まったのか、フォークにパスタを多めに巻きつけ口に運んでいる。

そのテーブルの中で、異色を放っているのがロランの食事風景である。ステーキを上品に切り分け、しつかりと味わうように肉を噛み締める。

そしてパスタを巻き取る際にもカチャカチャと音を鳴らさず、静かに口に運ぶ。

かといつて、粗野な冒険者が慣れない所作で振る舞つているよりも無く、彼の姿は実に自然なものであった。

「ベルさん、楽しんでいますか？」

彼らの座るテーブルに、微笑みながら近づいたのはベルをこの店に誘つたシル・フローヴァ当人だ。

「ええ……ちょっと、支払いは怖いですけど。それと今朝のお弁当、ありがとうございました」

「大丈夫だよ、ベル君。もし足りなかつたとしても僕が支払うさ」

「そう言う訳にはいきませんよ、ロランさん。今日は稽古とかのお礼も兼ねてるんですから」

「……どうやら、楽しんでいただけているようで何よりです」

「そうして、シルはもう一度ニコリと微笑んだ。

それとは対照的に、若干面白く無さそうな顔をしているのがヘスティアである。

「何だか自分が、のけ者にされてしまつていてるような――

「もちろん、何時ものお礼を神様にもしなきやいけませんからね」

ベルが一言放つた瞬間、女神の表情がパアッと華やいだ。

その様子を微笑ましそうな顔で見つめると、ロランに向き直り、シルはある種口ランに取つては爆弾ともいえる発言を投げかけた。

シ

「口ランさんは、上品に食事をなさるんですね。もしかすると、どこか國のお貴族様なのですか？」

口ランは、冷や汗が一筋背中を流れたのを実感した。

シルとベル、そしてヘスティアまでも彼の返答に興味津々といった表情で見つめている。

まさか、自分がとある國の王子であり、王位を継承される直前に逃げ出した——と、馬鹿正直に答えるわけにもいかない。

もしも正直に答え、都市中に広まつてしまつたとしたら、大幅な曲解を入れたはた迷惑な物語を作られるか、さらに強引な勧誘が行われるか。

とにかく、厄介なオラリオの神々に、どう反応されるか見当すらつかないほどに酷い事態になるのは間違いない。

オラリオに来てから、嘘をつく必要が増えたことにうんざりしながら何とか誤魔化すための返答を考え付いた。

「……いや、親が子どものしつけに人一倍厳しかつただけさ。別に、貴族つてわけじゃないよ」

確かに、貴族ではない。

口ランは間違いなく貴族より身分の高い王族である。

父が王であるからこそ、ある程度はテーブルマナーなどを仕込まれただけ。ギリギリ嘘はついていない……はず。

「そうだったんですか……」

返答を聞いたシルが、何故か残念そうな面持ちであつたことを、口ランは見なかつたことにした。

その後、テーブルの4人は食事を進めながら談笑を続けた。

シルはどうにも客の集まりが悪く、ミアの厚意もあつて少し休憩を頂けたらしい。

ベルが口ランにダンジョンで見せた功績を話せば、ヘスティアもそ

れに感嘆し、口ランも弟子に近い存在の成長に嬉しさを滲ませる。シルも彼がダンジョンに潜り始めてからまだ半月ほどしか経つていなにもかかわらず、斯様な活躍を見せていることに驚き、ベルに

興味を持つたようだつた。

一通りダンジョンでの冒険の話が終わり、食事もほとんど済んだとき、話の流れは自然と彼らが親交を深めている場所『豊穰の女主人』についての話へと、シルに質問するような形での会話へと移り変わつていつた。

シル曰く、女将のミアは昔は冒険者であり、店の従業員は女性のみ受付という規則が徹底的に守られている。

ミアは、いわゆる訳ありの人たちでも気前よく迎え入れてしまうため、脛に傷を持つ人も多いらしい。

その言葉を聞いて、ロランはシルには気付かれぬよう店内へと目を向ける。

確かに、彼から見ても、歩き方や姿勢が堂に入っている者が多い。一つの武を修めた者は、何気ない所作にこそ、その人の腕前を見ることが出来る。

少なくとも、彼女たちは今のベルでは相手にならない程に腕が立つのだろう。

「もしかして、シルさんも……？」

この、大変な失礼ともとれる質問をしたのはベルだつた。

そんな無礼な彼を戒めるため、ロランはテーブルの下で少年の靴を足先で軽く小突く。

それでようやく自分の失敗に気付いたのか、ベルは恐縮し、体を縮こめてしまつた。

シルは彼らの様子を見て楽し気に、しかし多少の苦笑は隠しきれなかつたようである。

「私がここで働いているのは、環境が良かつたからですよ。……それに、お給金も良いですし、ね」

「環境、かい？ 正直、冒険者なんて荒れたような人が多いし……良くないんじやないかな？ もちろん、僕のファミリアはそんなことないけどねつ！」

段々と席が埋まりつつある『豊穰の女主人』には防具を装備し、剣や槍などを手に持つ冒険者とおぼしき客が多い。

彼らのような荒くれ者たちの相手をするには腕の立つ従業員はともかく、華奢で可憐な女性には向かないと誰もが考えてしまうことだろう。

「いえ、そうではなくて……私はたくさんの、今まで知らなかつた人たちと触れ合うのが好きで……何というか、心が疼いてしまうんです」それはある種大胆ともいえる発言で、初心なベルを戸惑わせるには十分なものであつた。

しかし、ロランはその言葉には全く反応を示さず、ただ扉の入り口を見つめ続けている。

彼が感じ取つていたもの、それは——純粹な実力者が放つ、空氣。やがて、扉は開かれた。

現れるのは、ドワーフにアマゾネス、エルフに小人族バルウムまで、多種多様な種族の集団。

その誰もが統一されたエンブレムを身に着け、強者の風格を放つていた。

粗暴な男どもからは声が上がる。

『えらく上玉が多いじゃねえか』

『やめとけやめとけ、ありやあロキ・ファミリアだ。お前なんか歯牙にもかけねえよ』

探索と訓練に明け暮れるロランとベルはオラリオ界隈にあまり詳しいとは言えない。

しかし、それでも、かのファミリアの名前は聞いたことがある。戦闘の実力が求められる探索系ファミリアでも随一の大規模であり、一級冒険者たちが揃い踏みする屈指の戦闘集団だ。

店内は一時騒然とし、客はファミリアに属する女性たちの美貌に軽く口笛を吹き鳴らすものまでいる。

ちなみに、ベルは彼らの雰囲気に既に圧倒されていた。

当たり前の事だが、個々の実力で言えばロランが上である。

しかし、共に暮らし、教えを乞う中で親しくなつていつた彼とは違い、ロキ・ファミリアは正に未知の英雄の集団。

数で気圧されてしまつていたのである。

畏怖や尊敬の視線を集め、彼らの中でも、一際注目を集めるのが金糸の如く輝く髪をなびかせ、神秘的な印象を放つ少女である。

彼女は談笑する周りと関わることも無く、まるで心ここにあらずといった印象を周囲に与えていた。

彼女の姿に、ロランは見覚えがあつた。

彼がミノタウロスを屠った時、近くに居た男女の冒険者の一人である。狼人の男に庇われてはいたが、ロランには迷宮での短い会合であつたとしても、彼女が相当の剣士である事は見抜いていた。

まさか、かのロキアミリアに所属していようとは。

血を被らせてしまつた負い目もあり、あまり顔は会わせたくないと思つたのも仕方の無いことだろう。

幸い、食事はほぼ終わつた。あまり長居をしなければ問題は——
「あつ！ ドチビ！」

「げつ！ ロキ！」

先に声を上げたのは、ファミリアの先頭に立つていた女神。

朱の髪を紐で一つに束ね、朱の瞳を持つレンダーラ女性である。

彼女らの声色が嫌悪に溢れていたことから察するに、並々ならぬ因縁を持つだろうとロランは推測した。

思わず頭を抱える。

どうやら、手早く帰ることは諦めるしか無いようである……。

ロキとヘスティアは店内で大騒ぎを繰り広げ続けていた。
耳を澄ませると

「へん！ 母性のない胸のクセに、豊穣なんて名の付く店を気に入る
たあ笑いものだね！ ロキなんて永遠に手に入れるこの出来ない
夢に憧れ続けていればいいのさつ！」

「うつさいわ！ ドチビのくせにーーっつ！」

などと益体も無い喧嘩をやり合つてるので、見て見ぬふりをして
いるロランとベルを責められる者はいまい。

ロキ・ファミリアの面々も主神の事は取り敢えず横に置いておき、
バルウムの少年——もつとも、少年に見えるだけで十分に大人といえ

る年齢ではあるのだが——の音頭で宴会を始めてしまったようだ。

しかし、ヘスティア・ファミリアの面々は食事も終えており、客が増えたことからシルも席から離れてしまつたためどうにも手持ち無沙汰だ。

主神を置いて帰るという冷淡な選択肢はそもそも彼らの頭には浮かぶことすらない。

「……どうしましょう、ロランさん」

「まあ、二人が落ち着くのを待つしかないだろうね」

言いながら、ロランはロキ・ファミリアが座るテーブルに視線を向ける。

装備は充実し、練度も高そうだ。彼らはまさしくダンジョンを攻略するために存在する『軍隊』なのだろう。

様々な職業の冒険者が、互いの弱点を支え合い連携して行動する。それは、ダンジョン攻略における一つの完成形とも言えるもののかかもしれない。

ふと、魔法使いと見られるエルフの女性が天真爛漫なアマゾネスの少女がこちらに来ようとしているのを引き留めているのが見えた。
(……彼女には、取り敢えず頭の中で感謝しておこう。)

「あの、ロランさん。さつきからずっとこっちを見ている人がいるんですけど、知り合いでですか？」

「いや、向こうのファミリアに知り合いは——」

視線をすらした先にいたのは、件の女剣士——アイズ・ヴァレンシュタインが、こちらをジッと見つめ続ける姿であった。

その表情からはあまり感情は読み取れないが、ロランを見つめているのだから、彼に何がしかの用件があるに違いないと推測できる。「知り合いではないけど……ダンジョンで、迷惑をかけてしまつてね」正確に言うなら、かけたのは迷惑ではなくミノタウロスの血液である。ベルとの会話に戻るため、視線をアイズから外しベルへと向き直つた時である。

不意にアイズが立ち上がり、周囲の「どうした?」という疑問の声に反応も示さず、ヘスティア一行のテーブルへと一直線に歩み寄つ

た。

同じ店内であり距離も大したものではないので、ロランでさえ困惑を隠しきれないまま彼女がすぐ近くに立つことになる。

この時、ロランはダンジョンでの出来事について、こちらを責めるのだろうとしか考えていなかつた。

いくら汚れなど氣にしていられないダンジョンの中とはいえ、彼女を血塗れにしてしまつたのは彼自身の責任である。

とにかく、まずは謝らなければならないとロランがアイズに声をかけようとしたとき、彼女に先を越されてしまつた。

この時ばかりはヘステイアとロキもじやれ合いをやめ、様子を伺つてゐる。

——ただ、その言葉が両ファミリアを静まり返らせるには十分な衝撃を持つものであつたことは、ロランにも予想することが出来てはいなかつた。

「……その、どうか、私も貴方の弟子にしてください」

そして、深々と頭を下げる。

彼女の髪が礼に合わせてフワリと舞い、ベルはドギマギとしている。

彼女のような美人に、ここまで近づかれたことが今まで無かつたのだろう。

何だかベルはこのまま頭を下げる彼女を見つめ続けるのも悪い気がして視線を語りかけられた当人であるロランに目を向ける。

——驚愕した。

あの、ダンジョンでは冷静で、頼りがいがあつて、少年にとつて師匠のような存在であるロランが目を強張らせ、何かをこらえているような表情へと変わつていたのだ。

近くに居たベルだけが気付いた微かな変化だつたが、まるで何かを恐れているような素振りをロランが見せたのはこれが初めてなのではないか。

ロランには、かの魂に刻まれた傷が在る。

誰にも明かしたことが無く、おそらく、元の世界にだつて知る人は

いない。

気付いた者はいるかもしないが……。

豊穣の女主人に訪れている客の大半には、彼らの会話は聞こえていない。あるのは、あの『剣姫』が深々と頭を下げたという事実だけ。客たちは見ず知らずの青年に対し恐怖の感情を抱いたことだろう。

それが、畏怖の、恐怖の視線こそがロランの魂の傷を疼かせた。ロランはこれ以上、この場に留まりたくなかつた。

それが例え彼をねぎらうためにこの場を用意した少年に、ベルに対して悪いことであつたとしても。

「……ごめん、ベル君。ちょっと体調が、良くないみたいだから。先に帰つているよ。君は、ヘスティアさんと帰つてくれないかな」

「え、ええ……気を付けて」

——その言動が、ロランが一人にしてほしい、という意思表示であつたことにベルが気付いたかは分からない。

ただ、ベルはその言葉に従うべきだとは感じた。店中の人に見られながら立ち上がつたロランの後姿は何時もと違い、やけに小さく見えたことをベルは忘れないだろう。

「……ダンジョンでは、装備を汚してしまって、ゴメン。申し訳ないけど、弟子を取る気は無いんだ」

アイズにはすれ違ひざまに簡潔に断りを入れる。

『剣姫』が頭を下げて願つたことを無下に断ることは、申し訳ないことであるが、あいにくロランにとつてタイミングが最悪であつた。ロランは彼女を顧みることなく、出口から去つてしまう。

「ちよつ！ アイズ！ どこ行くんや！」

……ただ、少しの逡巡の後、彼を追いかけるように宴会をほつぱりだし、歩き去つた冒険者がいたこともここに記しておこう。

第十一話

ロランは喧騒を搔き分けながら、ローブのフード越しに眺めていた。すれ違う人たちに彼を気にするものはない。

それもそのはず、ロランは気配を消して歩いているのだ。完全に気配を消失させるのではなく、周囲に気付かれない程度に。

すれ違う人々の表情に暗い影を落としている者はいない。喧騒の中には笑顔と、はしゃぎ声と……時折、喧嘩でも起きたのだろう、怒鳴り声が響いていたが。

しかし、そこには紛れもなく——『平和』があつた。

ロランは、『勇者』はこれを目指して闘い続けてきたのだ。それが好ましいものでないはずがないだろう。

しかしながら、歩き彷徨い続け、オラリオの城壁にたどり着き、喧騒を振り返つて思うのだ。

——だからこそ、不気味なのだ、と。

ロランは石段を上り続ける。聴き慣れたブーツで石を踏みしめる音をただ一人で聴きながら。

それが、より一層……ロランが、自分自身が一人であること、孤独である事を認識させられる要因にもなった。

——この世界に、ただ一人の決定的な異物、それが僕だ。果たして、そんな自分が、この世界に居続けることが、オラリオの人たちにとって良いことなのだろうか——

自問自答しながら階段を登りきると、そこに広がる景色は想像以上のものであった。

一面に広がる建物の灯り、人々が呑み、語らい、そして騒ぐ姿。その景色は、平和を取り戻すために闘つてきたロランにはあまりにも眩しく、そして貴いものであつた。

そして、その中心にそびえ立つのが白亜の摩天楼、『バベル』。

今は街中の薄明かりに照らされ、薄暗さをもつてその威容を示している。

ロランは思う、この街はダンジョンに支えられている。

それが、決して悪いことだとは思わない。

しかし、それがただひたすら不気味なものだとロランには感じられた。

人を襲い、そして喰らう怪物たちによって人々の生計が成り立っているこの現状。

そして、足元にその怪物たちが蔓延つてゐるこの現状。
その現状すら、誰かの意思によつて創り上げられたものなのではなかとロランは危惧していた。

——決して偶然なんかじやない、誰かの意思によるものなのだと——

これは何らかの証拠を得て辿り着いた結論などではない。
強いて言うならば、ただの勘であつた。

しかし、たかが勘と侮るなれ。

数多のモンスターたちの惡意に晒され、數え切れない襲撃を退けて
培い、果てには大神官ハーゴンの悪辣な幻術を破つてみせた超一級の
勘である。

考えに耽り過ぎたところでロランはかぶりを振つた。

いくら考えたところで決して答える出る問題ではないのだ。
少なくとも、今はまだ。

結局ロランに出来ることはただ一つ。

——闘い続けること。人々を守るために。

だからこそ、強さを求めたのだ。

その強さが、神をも超えるものだとしても。

つまるところ、ロランはその身体も、その精神も、骨の髓まで勇者
なのだ。

幾ら人の恐怖を一身に受けようとも、人を守りたい、平和を守り続けたいという想いは変わることがなかつた。

ダンジョンがそもそも悪意によつて築き上げられたものかどうか
すら分からぬ。

オラリオが悪意に晒されてゐたとして、その正体が誰なのかすら見
当もつかない。

しかし、壁上から見た景色によつて、ロランが今まで抱いていた想いをさらに強めることができた。

「……」の街を、守るんだ。例え、一人でだつて。」

ロランは、自分がこの世界に来た意味は未だに分かつてはいない。共に神を打倒した仲間がいるということもない。

ただ、この世界で新しく出来た知り合いを、友達を、家族を、そして、この平和な街を守り切るためになら、また忌み嫌われたとしてもこの力を振るおうと思えた。

彼が顔を上げたとき、酒場で人の畏怖に触れたときのように怯えたものではなく、その瞳には力強い意志が宿つていた。しかし、

——その独り言が新しく出来た、ロランと共に闘うことを決意した家族の気持ちを裏切るものであることに、まだ気づいていない。

ふと、ロランは階段の方を振り返った。

そこから確かにコツ、コツと石段を靴底が叩く音が聞こえてくる。最初はファミリアのメンバーが追いかけてきたのかとも思つた。

しかし、ロランはその足音に違和感を覚えていた。

彼の優れた聴力はベルでもヘスティアでもないその靴音を聞き、体を強張らせた。

神々によるあの勧誘合戦は記憶に新しい。

できることなら、またあの騒動を引き起こしたくない……その一心で、『にげる』準備を整えていたところ、足音の正体がその姿を現した。

——長く美しい金髪に金の瞳、顔が整つており、まるで人形のようだが、確かな意志の強さを瞳に宿す少女の姿に、ロランは見覚えがあつた。

「たしか、君は……。」

ダンジョンで出会つた、ミノタウロスを追いかけてきていた少女剣士の姿であつた。

ミノタウロスの血糊をぶちまけてしまうというインパクトのある出来事だったので、はつきりと覚えていた。

「お願ひが、あります。私も、弟子にしてください。」

ある種の気まずさをもつて、酒場で逃げ出したことと、この綺麗な

少女の装備を汚してしまったことについて謝罪をしようとしたが、ロランは先手を打たれてしまった。

さらに、アイズ・ヴァレンシュタインの猛攻はそこで止まることはなかつた。

突然膝をつき、地面に座り込んだかと思うと、手のひらまでも地面につけて頭を深々と下げた。

ロランには知る由もなかつたが――それは、あまりにも見事な『土下座』の姿勢であつた。

「ま、待つて。そんなことをしたら服が汚れてしまうよ。顔を上げてくれないかな！」

土下座など露知らず、ロランは慌てふためるしかなかつた。

しかし、頑なに少女は姿勢を崩そうとしない。

顔を下げたまま、ただ一言、

「……キヨクターの人に教えてもらいました。お願ひをするとき使う最上級の姿勢だつて。」

「どうして、そこまで……」

弟子に、と言葉を続けようとしたところで、少女が顔を上げた。

そこで、ロランは気圧されてしまつた。

彼女の瞳の力強さに。

――ただひたすらに強さを求める、悲しいほどに強い瞳の光が、ロランにはあまりにも眩しかつたのだ。

「私は、強くなりたい」

一瞬の間も無く出たセリフ。

淡淡としていながらも力強い響きを持つ声色。

そこで漠然とロランは察したのである。

少女は過去の自分たちと同じであることを。

ロランたちは、ただひたすらに強さを求めていた。

モンスターたちと戦うため、大神官ハーゴンを倒すため、そして世界に和平を取り戻すため。そして、

彼女も何か、かけがえのないものを守りたいことを。

そのとき、ロランは決めたのだ。

助けになるかどうかは分からなければ、彼女の要望を叶えてあげようと。

「……わかつたよ。ただし、弟子入りは仲間の許可を取つてからにしてくれるかな？」

彼女は酒場で頼もしそうな仲間たちに囲まれていた。

ファミリア間でのトラブルはもうごめんである。

ただ、そんな面倒ごとになる可能性を孕んでいたとしても、ロランには彼女の瞳を裏切ることが出来そうになかったのである――